

平成 25 年度
自己点検・評価報告書

目 白 大 学

大 学 院

(1) 特筆すべき事項

<教育>

- ①平成24年度に整えられた研究科専任教員全員で修士論文指導に当たる体制が軌道に乗り、教員1名あたりの担当学生数が適正化された。
- ②修士論文指導教員の決定を教員との面談と希望調査票の提出に基づいて行う方法を徹底したことにより、ミスマッチ問題が改善された。
- ③修士論文中間発表・最終試験を行い、学生全員の出席を義務づけ、教員も極力出席して研究科全体で論文指導に当たる体制を強化した。

<学生指導>

- 修士論文題目を提出した者は21名いたが、実際に修士論文を提出した者は12名であった。
学生の情報を共有するなどして、よりきめ細かい指導を心がける必要がある。

<社会貢献>

- 社会学部地域社会学科主催の「地域フォーラム」に共催の形で協力した。

<組織マネジメント>

- ①合格した修士論文を製本・管理するとともに、優れたものについては要旨を本学公式ウェブサイト上で公開している。
- ②時間割編成にあたって、研究科の授業科目ができるだけ重ならないように配慮した。
- ③入試広報部の支援により、学生募集のための研究科紹介チラシを制作し、関係者に配布・送付した。
- ④平成26年度入試は定員20名に対して21名の入学者を確保した。
今後、日本人学生の入学者を増やすよう、入試広報戦略を見直す必要がある。
- ⑤交代要員として、新しい非常勤講師2名（「グローバルビジネス研究」「考古学研究」）を迎えた。
- ⑥厚生労働省の教育訓練給付講座への新規指定を申請し、認可された。これにより、平成26年度4月以降に本専攻に入学する社会人学生は、一定の要件を満たせば修了後にハローワークから教育訓練給付金の支給を受けられるようになった。

(2) 今後の課題

<教育>

- ①新しい修士論文指導体制における（運営委員でない教員が指導教員になる場合の）主査・副査の役割分担を明確にする必要がある。
- ②ゼミ生が少なく研究室が閉鎖的になりがちなので、他のゼミとの交流や共同研究などを通して研究科が活性化するような方策を考える。

<学生指導>

- ①大学全体の中で大学院生は孤立している感があるので、学部の留学生会との交流や学生サービスグループとの連携を図る。
- ②大学院生の就職活動を支援するために、キャリアセンターとの連携や修了生とのネットワークの構築を図る。

<社会貢献>

- ①観光・文化・環境などの分野におけるボランティア活動を通して、大学院生が気軽に国際交流や社会貢献に取り組める体制を整える。
- ②社会学部地域社会学科との共催でシンポジウムを開催し、可能なら国際交流をテーマとした企画を提案したい。

<組織マネジメント>

- ①留学生が多いことは良いとしても現在は中国の留学生ばかりであり、今後は非漢字文化圏も含む多様な国々からの留学生を確保する。
- ②特に海外に進出する企業をターゲットに広報活動を広げ、教育訓練支援給付制度の指定講座である点もPR材料として社会人学生を確保する。
- ③本学の学生・卒業生、他大学の学生・卒業生、リタイア世代、主婦など、異文化交流や多文化共生の問題に関心を持つ多様な層からの掘り起こしを図る。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	国際交流専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①平成25年7月30日に開催された修士論文の中間発表会や平成26年2月7日の修士論文の最終試験では、出席した教員の有益なコメントやアドバイスがあり、その後の論文作成指導に有効であった。</p> <p>②前年度に引き続き、学生と教員のミスマッチ防止のため、1年次秋学期から履修するゼミの決定を、春学期の指導教員の面接による希望票に基づいて行った。</p> <p>③前年度までと同様、留学生には日本に関する研究や日本と母国との比較研究をなるべく行うように勧めている。</p> <p>④修士論文の要旨のうち優秀なものについて、本学の公式ウェブサイト上で公表を行っている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①修士生の学会や研究会での発表、紀要などへの投稿を奨励する。特に優秀で当該分野で一般に活用資すると思われる論文については出版を勧める。過去に日本人の社会人学生に修士論文の出版を勧めたが本人の意向で実現されなかった。今後も、適切な論文については奨励を計画的に行っていきたい。</p> <p>②学生の質（特に留学生の日本語能力と専門の基礎学力）が低下傾向にあることから、入試で可能な限り質の高い学生を確保する。入試における筆記や面接の中で日本語能力や専門的な基礎知識をさらに厳しくチェックし、日本語能力が不足の場合には翌年度の受験を勧めていく。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○前年度に引き続き、病気や就職活動によって授業の欠席が多い学生のフォローアップを行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①就職活動の助言や就職後の学生のフォローアップ体制を作る。就職活動の助言は授業やゼミで問合せがあれば随時、行ってきた。また、就職先についても大学での3月の学位授与時に毎年確認をしている。しかし、その後のフォローはほとんど行われていない。</p> <p>②月1回のオフィスアワーを設けて学生の相談に応じる。留学生が多いので学園生活や履修方法などにきめ細かい指導をする。また、担任の先生はアルバイトや出席状況などの情報収集に努めて適宜、アドバイスを行う。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○JICAや自治体などとの連携により、国際交流に関するプログラムを推進し、参加する。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①広報活動・学生募集強化のため、オープンキャンパスでの進学相談や研究室での相談会、研究科紹介のチラシの製作・発行を実施した。</p> <p>②厚生労働省の教育訓練給付制度の対象講座として新規指定の申請が認可されて平成26年度入学者から適用されることになり、本専攻への社会人学生が実質的な学費減免措置を受けられるようになった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①国際交流に相応しい欧米やインドなど多様な国からの留学生（現在は中国が大半）と、実務の特性を活かした社会人学生を確保する。日本人の学生確保には新宿キャンパスの学部生への説明会の開催、社会人については教育訓練給付制度の対象講座になったことを活用する。</p> <p>②留学生と社会人を含めた日本人学生との学生数のバランスを考えて異文化の相互交流を図る。</p> <p>③同種の他の大学院との交流を図り、授業の効果を高めていく。</p> <p>④国際交流の目指す視点から最新の現場の授業内容も必要とされ、国際交流基金などから外部講師を招き年1～2回、講演やセミナー（ワークショップ）を実施し国際交流の実践に触れる。</p> <p>⑤将来的には受験科目に英語を課したり、欧米の文献の原書講読を科目に入れる。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○修士生の就職先などについてフォローアップをする。また、修士生との交流の輪を広げる仕組みを作る。</p>			

(1) 特筆すべき事項

- ①心理学研究法における統計法や演習・実習に関わるカリキュラムを整備し、研究倫理審査の申請のための講習会を実施して、学生の論文執筆能力や研究レベルを向上させた。
- ②平成26年度入試の志願者数が、各専攻とも前年より減少した。現代心理学専攻は志願者16名（前年比2名減）、臨床心理学専攻は志願者85名（前年比22名減）、心理学専攻（博士後期課程）は志願者2名（前年比1名減）であった。特に、臨床心理士を志望する学生の減少は全国の大学院で報告されているが、臨床心理学専攻では前年度より2割減で、これは2年前の志願者159名の約半数であった。
- ③平成26年度の入試の結果、前年度に引き続き各専攻とも入学者が定員に満たなかった。現代心理学専攻は定員20名に対して入学者15名、臨床心理学専攻は定員30名に対して入学者19名、心理学専攻（博士後期課程）は定員3名に対して入学者1名となった。
- ④平成25年度臨床心理士資格試験での現役合格率（平成25年3月修了者の合格率）が78.3%と大幅に向上した（前年度は38.5%）。ちなみに全国平均の合格率は62.4%であった。

(2) 今後の課題

- ①心理学研究倫理についての学生の自覚の向上
- ②大学院中退・留年学生、および修了後も認定資格試験に不合格となっている学生（臨床心理学専攻）への支援
- ③「公認心理師」（仮称）の国家資格が法案化される可能性が高まり、それに伴う学部・大学院のカリキュラムの再検討
- ④将来のカリキュラム変更を視野に入れた教員の適正な再配置
- ⑤学内からの進学者および外部受験者・入学者の増加に向けて研究科全体として対策を講じる必要性
- ⑥教員個人ではない、研究科または専攻単位の社会貢献のあり方についての検討

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	現代心理学専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①研究法及び演習・実習科目を中心にした新しいカリキュラムは、ほぼ狙い通りの成果を得ることができた。</p> <p>②学生の準備状態に応じた、丁寧な指導ができた。</p> <p>③修士論文の質が少しずつ上がってきている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○今の教育方針を踏襲し、準備状態に応じた丁寧な指導を心がけることによって、研究、論文の質をさらに上げる。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○全般的には大きな問題は無いが、中退生、修了延期生の理由を確実に把握し、対応する必要性について検討する。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○専攻としては特段無いが、教員個人個人が活動することで、貢献できている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○専攻単位よりも、研究科単位で考えた方が現実的である。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教員各人が専攻内での役割を自覚して動いているので、基本的な問題は無い。</p> <p>②教員同士の協力関係がうまくいっている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○教員の定年退職に伴う適切な人材の確保が必要。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○入学者数が2年続けて定員を割った（平成23年度は定員20名に対して入学者23名、24年度は16名、25年度は15名）。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①修了生が日常的に研究科、キャンパスにははいりして活動できるような仕組みや居場所づくりが必要。</p> <p>②入学定員を満たすための学生募集活動が必要である。特に、社会人からの入学者を増やす方法を考えることが必要。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	臨床心理学専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①修士論文作成のための研究法の授業を充実させるため、心理学統計法特論を新たに開設した。</p> <p>②平成25年度臨床心理士資格認定試験において、平成25年3月に修了した学生23名のうち18名が合格し、現役合格率は78.3%と全国平均62.4%を大きく上回る成績であった。</p> <p>③臨床心理学専攻主催による臨床心理士試験合格体験講演会を3月19日に行い、2名の修了生が講演した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>臨床心理士資格認定試験合格率の維持・向上を図る。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>修士論文作成のための研究において大学の倫理審査が必要な研究については、臨床心理学専攻内で本年度より倫理審査申請書を提出する学生を対象に2回の講習会を実施した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>研究倫理についての学生の意識を高める指導が必要である。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>専攻としてではないが、個々の教員による以下の活動を行った。</p> <p>○「イノベーション・ジャパン2013」(10月)に、原田隆之准教授の「断酒・節酒・禁煙に向けての自習式ワークブック」が選出され、出展した。</p> <p>○心理、教育、福祉、医療に携わる専門家・大学院生を対象とした心理カウンセリングセンター主催の下記ワークショップが開催された。</p> <p>「絵画療法を学ぼう(田中勝博教授)」</p> <p>「東洋療法的リラクゼーションを学ぶ(奈良雅之現代心理学専攻教授)」</p> <p>「認知行動療法による禁煙指導:リラプス・プリベンション・モデル(原田隆之准教授)」</p> <p>「箱庭療法の基礎(深山いずみカウンセリングセンター助教)」</p> <p>○和光市・和光市教育委員会後援により、一般地域住民を対象とした心理カウンセリングセンター分室主催の公開講座を開催した。</p> <p>「子どもの心の声を聴く～カウンセリングに学ぶ話の聴き方～」講師:沢崎達夫教授 司会:小池眞規子教授</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○現代心理学専攻とともに心理学研究科としての社会貢献のあり方を検討する。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>事故や災害時における臨床心理学専攻としての対応を検討した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>学部・大学院・心理カウンセリングセンター相談員としての教員の多重役割について、負担を軽減する検討が必要である。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①臨床心理士資格認定試験に2年以上不合格となった多重浪人学生についての対策。</p> <p>②臨床心理学専攻を修了し、さまざまな臨床の場に就いた修了生の中で、スーパービジョンを希望する者に対する対策。</p> <p>③昼間の大学院希望者が増加する中で、臨床心理学専攻が昼夜開講制を継続することのメリット・デメリットの再検討。</p>			

自己評価

(1) 特記すべき事項

- 学位論文作成で担当教授から個別指導を受けると同時に、全員ではないがTA学生として採用し、修士論文作成の補助を通じて能動的な教育指導の役割を取らせている。

(2) 今後の課題

- レフリー付き雑誌への積極的投稿の促進
- 課程在籍中の論文執筆の指導

(1) 特筆すべき事項

- ①経営学研究科として初めて名誉博士の称号を出すことを研究科から申請し、学長より許可された。その結果、11月末日付で博士後期課程を自主退学した加藤隆之氏に目白大学名誉博士（経営学）の称号が授与された。
- ②修士課程、博士後期課程ともに近年はほとんど受験者がいなかったAO入試を、平成25年度実施の入試（平成26年度入学者選抜）から廃止した。
- ③平成25年度に実施した平成26年度入学者の選抜入試では、修士課程の志願者数が30名（平成24年度31名、23年度35名）に対して合格者数は6名（平成24年度は17名、23年度は20名）、博士後期課程は志願者数が2名（平成24年度は0名、23年度は1名）に対して合格者数は1名（平成24年度は志願者なしのため0名、23年度は1名）とした。志願者数は例年とほぼ同じだったが、特に修士課程は入学者の学力レベル維持を重視したため、入学定員20名を大きく割り込んだ。
- ④修士課程は厚生労働省の教育訓練給付制度の指定講座となっており、平成25年10月が3年ごとの更新期であったところ、会計学と経営管理の分野別2コースと修士論文・特定課題論文の修了方式別2コースを組み合わせた4コースのうち、会計学分野の特定課題論文コースだけは、過去数年間にわたり受講実績がなかったことを理由に指定申請が認可されなかった。ただし、平成26年4月からカリキュラム改訂により会計学分野と経営管理分野の区別を廃して修了方式別2コース制とすることになり、その内容を改めて11月に新規指定申請したところ認可され、平成26年4月より引き続き修士課程全体が指定講座として継続されることになった。
- ⑤昨年度の課題として挙げていた「研究環境の充実の1つとして経営学の全分野をカバーできるだけの文献データベースの導入」は、文献データベースEMERALDを図書館の協力を得て導入することにより達成された。

(2) 今後の課題

- ①本研究科は修士課程の留学生比率が高すぎる（平成25年度は修士課程在学学生42名中、27名が留学生）ので、レベルの高い留学生に絞ることと、社会人学生に入学してもらうようにすることが課題である。
- ②学生のレベルを維持する一方で、修士課程の入学定員20名を無視することもできない。学力のある志願者をどのように増やすかを具体的に検討し、募集活動に活かさなければならない。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	経営学専攻(修士課程)
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①経営学の基礎学力が不足している留学生について、関連する経営学部の講義の履修を推奨し、講義に出席し基礎知識の習得を図った。担当教員は、各期末試験の採点も行い学習状況の問題点を把握して個別指導に役立てている。</p> <p>②経営学フォーラムの時間において、論文の作成方法、プレゼンテーションの方法等について講義を行い成果を得た。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○会計分野の学生の中にも基礎学力の不足が見られることから、入学試験合格者に対する入学前教育についても経営学研究科として議論しながら対応策を検討する予定である。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①経営学フォーラムの時間に、留学生のための就職説明会を行った。外部講師により法律手続き面、求人票の見方及び応募する場合の問題点について具体的な情報が説明され充実したものとなった。</p> <p>②教員一人当たりの学生数の偏在が改善されてきたことにより、丁寧な研究指導が行われている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>特になし</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○経営研究所・経営学部の協賛を得て、実務家2名の外部講師を招き公開講座を行い、多くの学生が出席した。さらに、その成果を学生による目白大学新聞を通じて公表した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○経営研究所と協賛の上、書籍による研究成果の外部への公表を行う予定である。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①経営管理コースによる教員一人当たりの学生指導数の偏在について改善を行うことができた。</p> <p>②研究科委員会について、学科会議後に実施することにより、内在した問題点の多くの改善を図ることができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○経営学関連科目の専任教員が不足していることから、教員の公募による補充が急務である。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○日本人学生の在籍数が減少していることから、継続的に受験者の増加を図るために、欠員状況分野の教員の補充を行い、少人数教育による大学院教育が充実していることを外部へ情報発信していく。</p>			

自己評価

(1) 特筆すべき事項

○博士後期課程に在学中であった加藤隆之氏（92歳、元・日本公認会計士協会本部東京会長）に対し、11月末日付で本学を自主退学した後に名誉学位（目白大学名誉博士（経営学））を授与することとなり、慎重な審議を経て3月に大学より授与された。

(2) 今後の課題

○博士後期課程に社会人学生を増やすことである。現時点では企業のサポート体制は崩壊しているので、ターゲットは企業で実績を積み、定年を迎えた人である。そのためには、企業のトップレベルの人の講義、講演会、シンポジウムを増やし、広く社会に情報を発信する必要がある。

(1) 特筆すべき事項

【生涯福祉研究科の周知を図る取り組み】

①生涯福祉研究科主催の公開シンポジウムを企画

本研究科の広報活動の一環として、昨年度に初めて開催した研究科主催の公開シンポジウム「高齢者とともにー在宅高齢者への地域における支援とその課題ー」を今年度は2月に企画したが、大雪のため次年度に延期した。

②学科及び外部団体主催の講座への協賛

一昨年度から外部団体の主催する研究会・フォーラム・研究会などが学内で開催される場合、生涯福祉研究科名を協賛や共催として明記するようにした。今年度は子ども学科主催の公開講座、学内NPO法人障害者就業生活支援開発支援センターGreen Work21研修会、リハビリテーション学研究科共催の日本リハビリテーション連携科学学会、厚生労働省委託事業である全日本手をつなぐ育成会就労支援セミナーで協賛した。

【研究指導の強化】

①韓国からの留学生を初めて「育てて送り出す」

本研究科で初の韓国入院生が「日・韓児童養護施設職員の職業意識が離職意識に与える影響に関する研究」をテーマに、日本と韓国でアンケート調査をして修士論文をまとめた。修了後は日本社会事業大学大学院博士後期課程へ送り出すことができた。

②授業科目の担当教員の変更

「生涯福祉総論Ⅰ（児童期・青年期）」を担当していた非常勤講師の任期が終わり、その科目に専任教員を配置し、合わせて「児童福祉特論」「ソーシャルワーク演習Ⅲ（チャレンジド）」の担当教員を変更し、「子ども・家族支援特論」「権利擁護特論」「現代保育特論」を非常勤講師で対応した。

③留学生に対する指導体制

留学生の大学院生や研究生が増え、日本語能力の不足や社会福祉に関わる知識の乏しさが授業の理解度や指導に影響を与えている。そのため、論文作成に中国籍の外部講師のアドバイスを得ることや学部の福祉や日本語教育の授業の聴講などを義務づけた。

【学生募集関係】

○平成23年度にAO入試を導入し、一般入試の試験科目から英語を外し、平成24年度からAO入試、社会人入試の受験資格を明確にし、試験形式も変更するなど社会人の入学希望者が受験しやすい体制を整えた。同時に面接担当教員を増やして社会人体験・現場実務の能力や研究計画の内容を厳正に判定する入試体制にした。その結果、今年度は9名が受験し6名を合格とした。

○厚生労働省の教育訓練給付制度の指定講座として新規指定の申請を行い、認定された。平成26年度入学の院生より適用され、所定の要件を満たす社会人は修了後に教育訓練給付金を受給できることになった。

○入学希望者の増加につなげるためにも、公開講演会と認定社会福祉士申請の検討を行うための次年度予算を新たに申請した。

【文部科学省私学助成金による福祉関係電子図書の採択】

文部科学省私学助成金による福祉関係電子図書の購入の申請をし、150冊の購入が採択され、教員の研究に活用できるようになった。

【大学院生との話し合いの機会を設定】

初めて大学院生との話し合いの場を設定し、院生が教育を受ける環境や資格に関わる他の研究科の授業について意見交換し、その実情を知ることができた。これを教育環境の改善につなげ、また、院生と教員の意思疎通を高めるため、定期的話し合いを行うことにした。

(2) 今後の課題

【応募者・入学者数の確保】

①生涯福祉研究科の魅力を周知する活動

研究科の魅力を知ってもらう取り組みとして、これまで、公開シンポジウムの開催、実習施設などへのチラシの配布、目白大学での福祉関連の研修会への協賛などを行ってきたが、今年度は公開講演会を実施する予定であり、研究科の周知に努める必要がある。

②学科の卒業生へリカレントの周知

学部学生に対して早い時期から大学院について広報したり、卒業生に対しても学科のニュースレターや同窓会報などを通して働きながらリカレントすることの意義を伝えて学びを促したりすることを定期的に行い、入学者の確保につなげる。

③大学院の科目に介護領域や教育領域を組み込む

福祉領域の中に介護に関わる科目を設定し、介護を仕事とする社会人の学びの場にすることを検討する。また、教育現場の教員が、福祉領域の障害に関わる知識や臨床をより専門的に学べる科目も設定することで教育領域からの応募者も入学できるよう検討する。

④資格のキャリアアップに応える仕組みを検討する

臨床発達心理士受験資格や幼稚園教諭専修免許を取得できる科目を配置してきたが、新たに、認定社会福祉士認証・認定機構の認定社会福祉士の資格取得が可能になるよう大学院の科目の認証について検討する。また、大学で社会福祉士や精神保健福祉士、介護福祉士を取得できなかった学生に対して資格取得につながる仕組みを作ることが可能か模索する。

⑤多くの社会人が入学できる仕組みを考える

問題意識を持つ実力のある社会人が入学できるよう他大学・研究科の入試形態の情報を集め、研究科の実情をふまえて検討する。

【大学院教育】

①留学生に対する対応

多くが福祉の知識に乏しく日本語能力が不足するため、修士論文の指導に教員が苦慮している。学部の日本語や福祉の科目の聴講など、柔軟な対応や指導が必要になる。

②大学院教育科目の見直し

社会状況をふまえ、社会が求める大学院教育や生涯福祉研究科の立ち位置を確認し、カリキュラム構成、修士論文の在り方、専攻について、他大学の情報収集もふまえて検討を深める必要がある。

③実践的研究の推進

より高度な専門職の養成につなげるため、多様な研究・調査の場（NPO法人障害者就業生活支援センターや福祉フォーラム・ジャパン）をさらに活用するとともに、院生が在職する福祉施設と連携して実践的研究を推し進める仕組みを確立する必要がある。

④他の研究科との情報や研究の交流

心理学研究科、リハビリテーション学研究科などと連携して情報の共有や研究会を通して教員、院生の視野を広げるとともに研究を深める機会にする。また、資格取得に関わる他研究科と時間割など情報を共有して院生の学びに支障が出ないようにする。

⑤近隣の大学や外国の大学との交流

昨年より一部の教員と院生などが韓国の大学の福祉関係の教員や学生と交流をしている。教員や院生の視野を広げ、研究につながる交流を継続したい。また、近隣の大学の教員や院生との交流により、授業の領域を広げ、学びを深める方略を模索する必要がある。

【研究科組織と運営】

○専任教員の全員が学部兼務（子ども学科及び人間福祉学科）であるため学部の人事が優先され、大学院の人事もそれに従わざるを得ない難しさがある。科目によっては大学院専任の特任教員などの採用を求め、質の高い教育を可能にすることが必要であろう。

○研究科における教員の役割と分掌を明確化し、大学院教育の一層の充実に向けて運営する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	生涯福祉専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①韓国からの留学生1名が修了し、日本社会事業大学大学院博士後期課程へ進学した。</p> <p>②院生の研究の進捗状況に合わせて研究デザイン発表Ⅰ、Ⅱの機会と中間発表の場を設けて、指導教員だけでなく多くの教授からアドバイスや指導を受ける機会とした。</p> <p>③理論と実践の学びと共に修士論文の研究を深めるために、院生の臨床現場への見学や参加を今年度も積極的に進めた。</p> <p>④研究生、院生、主に海外留学生に学部の講義を聴講可能とし、不足している語学や専門知識の補完の機会とした。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①留学生の語学の向上、専門知識の不足、国情の違いによる課題が大きくあるが、困難なく学べるための体制の確立を進める。</p> <p>②社会人院生の研究活動の時間的制約考慮して、指導時間や日程をカリキュラム以外でも柔軟に対応できることの検討が必要である。</p> <p>③資格に関わる科目の時間割は他研究科と情報を共有しながら作成する必要がある。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①少人数の講義が多いため、きめ細かに行うことができている。</p> <p>②福祉現場で働いている院生もいるので、具体的な事例を取り上げてディスカッションが行える。</p> <p>③留学生もいるので、それぞれの国の制度の違いや価値観の違いなどグローバルな視点で考えることができる。</p> <p>④院生との意見交換会を行う。</p> <p>⑤中国からの留学生に対する支援として、中国語学科の協力を得る道を開いた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学会参加や発表の機会を積極的に進める。</p> <p>②修士課程修了後の具体的な活動場所の支援。</p> <p>③同窓会組織の構築。</p> <p>④院生と意見交換をしつつ情報を共有する。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①今年度も公開シンポジウムの開催を2月に予定していたが、大雪のため次年度に延期とした。</p> <p>②3月に開催されたリハビリテーション連携科学学会に協賛した。</p> <p>③NPO障害者就業生活支援センターの学内運営を昨年度に引き続き支援し、研修では協賛した。</p> <p>④NPO障害者就労支援チャレンジショップの学内での運営と障害者による販売実習の支援を昨年度に引き続き継続した。</p> <p>⑤NPO福祉フォーラム・ジャパンの支部活動を行う。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①福祉領域を広げて公開シンポジウムを開催する。</p> <p>②福祉領域の公開講演会を開催し、福祉施設関係者や地域住民、院生、教員の参加を求め、学びの場とする。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①月1回の専攻科会議の開催が定期的に行われ、教員間の共通認識が進んだ。</p> <p>②入試広報、教務などの役割を担当教員がしっかり果たした。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①専攻科の科目の見直し、介護福祉士や認定社会福祉士への対応を検討する。</p> <p>②研究科内の役割をより細分化して内容を確認して担当教員を配置し、教員全員で運営する体制を作る。</p> <p>③生涯福祉研究科と関連した他の研究科との連携を図る。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①院生確保のために、オープンキャンパスだけでなく人間福祉学科10周年記念や福祉施設への実習巡回指導などの際に、生涯福祉研究科パンフレットを配布した。</p> <p>②入学希望者が漸増し、今年度は9名の受験者に対して6名を合格とした。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①入学希望者を増やすために、公開シンポジウム、公開講演会を通じて生涯福祉研究科をアピールするとともに、社会人が入学しやすい方法や教育内容について検討する。</p> <p>②研究科の課題についてワーキング・グループを作って検討する。</p>			

(1) 特筆すべき事項

【教育】

- ① 6月に外国語教育研究会を開催し、修了生による修士論文作成に関する経験談を在學生に聞かせる機会を設けた (英語・英語教育専攻)
- ② 2年次生12名、過年度生2名の計14名全員が修士論文を提出し修了に至った (日本語・日本語教育専攻)
- ③ 東アジアの主領域をカバーしたカリキュラムを用意し、また、現地に赴いて事象の理解を深め、資料を収集する「臨地研究」の科目の充実を図っている (中国・韓国言語文化専攻)

【学生指導】

- ① 精神的または経済的な問題を抱えた院生に対し、ゼミの指導教員が中心となって適切な指導・助言を行った (英語・英語教育専攻)
- ② 交換留学生枠で中国の協定校から大学院生1名を受入れ、韓国の協定校に本学の大学院生1名を派遣した (中国・韓国言語文化専攻)

【社会貢献】

- ① 公開授業の実施や研究会の開催を通して、大学院生に対してだけでなく、広く英語に関心を抱いている一般の人々にも最先端の研究事例を紹介できた (英語・英語教育専攻)
- ② 日本中国語教育学会、日本韓国語教育学会の大会、研究会等において本学教員が中心的役員として活動した (中国・韓国言語文化専攻)

【組織マネジメント】

- 専攻主任を中心に大学院生の指導に組織的に対応している (特に中国・韓国言語文化専攻)

【その他】

- ① 公開授業を実施し、また公開シンポジウムや外国語教育研究会を開催するなど、研究活動の活性化に貢献できた (英語・英語教育専攻)
- ② 厚生労働省の教育訓練給付講座として指定を受けることができ、社会人学生のさらなる獲得に弾みがついた (日本語・日本語教育専攻)

(2) 今後の課題

【教育】

- ① レポートや修士論文の作成に関する基本的な指導を徹底する必要がある
- ② 留学生を含め、日本語学及び日本語教育学を志望する学生が大半を占めており、特定の教員に過重な負担がかかっているため、適切な人員配置を行う必要がある (日本語・日本語教育専攻)
- ③ 中国言語文化分野と韓国言語文化分野のそれぞれの自立と協力の在り方を再検討する必要がある (中国・韓国言語文化専攻)

【学生指導】

- ① 修士論文を日本語で書くことに躓いてしまう留学生に対して然るべき支援が必要である (英語・英語教育専攻)
- ② 留学生の日本語・日本文化に関する全般的な知識不足の問題はかなり深刻で、何らかの対策を要する (特に日本語・日本語教育専攻)
- ③ 大学院の交換留学制度を充実させる必要がある (中国・韓国言語文化専攻)

【社会貢献】

- ① 日本語教育学会の大会あるいは研究会などを本学に招致する予定である (日本語・日本語教育専攻)
- ② 国際的な研究者交流を考える必要がある (特に中国・韓国言語文化専攻)

【組織マネジメント】

- ① 専攻開設以来入学者数の低迷状態が続いており、入学定員10名の確保に向けた組織的な取組の実施、あるいは定員5名への削減案の検討が必要となっている (英語・英語教育専攻)
- ② 日本語学・日本語教育学への専攻志望者の偏りという問題を解消する方向での教員の適正配置が必要である (日本語・日本語教育専攻)
- ③ 大学院生が将来博士号を取得できるように組織的に支援する必要がある
- ④ 大学院担当教員が教育から研究に力点を移せるように、マネジメント上の配慮が必要である (特に中国・韓国言語文化専攻)

【その他】

- ① 院生確保のための広報活動の充実・強化が必要である (特に英語・英語教育専攻)
- ② 他大学等の非常勤講師を務めるなど経験豊富な社会人修了生を、本学の有期雇用ないし非常勤講師等の然るべきポストで採用することにより、結果として日本人学生志願者の増加などの好循環へと結びつけていく努力をする必要がある (日本語・日本語教育専攻)
- ③ 中国言語文化分野と韓国言語文化分野の分離を検討し、同時に博士課程の設置を検討する必要がある (中国・韓国言語文化専攻)
- ④ 本研究科の設置目的の再検討、及び今後の人材育成目的の明確化が必要となっている

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	英語・英語教育専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①修士論文最終試験では、プレゼンテーションの練習を徹底し、説得力のある発表を行った例がみられた。また、発表や質疑応答もすべて英語で行った例があり、他専攻から、他専攻の参加者にもわかるように日本語で発表するべきであるとの意見が出された。今後、発表言語において3専攻で検討することになった。</p> <p>②6月の外国語教育研究会では、修了生が修士論文の書き方、完成へ至るプロセスにおける苦労話や工夫などを発表した。在学生には論文作成へ向けて大いに参考となった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学生間で、口頭での英語表現力において学力差がみられる。授業では英語の討論の時間他を通して、英語でディスカッションできる能力等の向上を図る必要がある。</p> <p>②平成25年度ではないが、過去において、いわゆるコピーで授業成績が不可となった学生が複数見られた。今後、剽窃を起こさないよう、あらかじめ、引用のやり方に関する注意事項などを徹底的に指導する必要がある。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>論文の執筆過程において、精神的に停滞する院生が散見する。特に留学生や経済的な問題を抱えている学生は、精神的に落ち込み、論文の執筆が進まない例が見られ、よりいっそうの配慮が必要である。今年度もゼミの指導教員が中心となり、面談時間を増やし、学生の心身面での助言を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>高度の英語力があり会話における日本語使用にも問題ないが、日本語で論文を書く作業となると初歩からの指導が必要とな留学生がいる。また、英語力はあるのだが、日本語会話と日本語作文、両者とも初級レベルからスタートする場合もある。このような場合、精神面で動揺が見られることがあるので、ゼミの教員を中心に、日ごろから見守り、支援する必要がある。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>公開授業や研究会を開催し、大学院生だけでなく、一般の英語に関心のある人々にも最新の研究や事例を紹介することができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>テーマを厳選し、一般の社会人が興味を持って参加できる研究会他を企画する必要がある。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>入学定員の充足ができていないため、閉講となる授業が見られる。入学定員確保に向けて研究科全体の組織的な取り組みが必要である。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>定員10名のところ入学者が4名で、定員を大きく下回った。定員の充足に向け、専攻の構成員全員が協力して入試広報活動を行う必要がある。また、専攻開設以来、入学者数は低迷を極めていたため、定員5名への変更を検討すべきである。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>公開授業や、公開シンポジウム及び外国語教育研究会を開催し、研究活動の活発化に貢献した。</p> <p>①第5回外国語教育研究会 (6/23) 参加者24名 講演「古くて新しい教育—CLIL (Content and Language Integrated Learning)」 笹島茂 (埼玉医科大学) 発表「成人学習論に基づく日本語教師研修と力量形成—一日中の教師研修から—」 池田広子 (目白大学) 修了生シンポジウム: 「私はどのように修士論文に取り組んだか」</p> <p>②英米語学科共催 (10/26) 「日本の英語教育を発信する 第6弾」 参加者50名 講演「グローバル人材の育成に向けて —IB (インターナショナルバカロレア)」 星野あゆみ (東京学芸大学附属国際中等教育学校) シンポジウム『世界の英語 —多様な英語にどのように対応するか』 提案者「ビジネス英語の視点から」 柴田真一 / 「音声学の視点から」 広実義人 / 「社会言語学の視点から」 薬師京子</p> <p>③公開授業 岡秀夫『早期英語教育学』 「子供のバイリンガル発達—プラスかマイナスか?」 (12/4) 参加者6名</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>大学院生だけでなく、学部学生が興味を持つ研究の紹介など、大学院の内容を広く周知する取り組みが必要である。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	日本語・日本語教育専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①非常勤講師1名が本務校の海外留学のため不在となり、春・秋学期とも1コマずつ開講不能となった。次年度の講義に留学成果が反映されることを願う。</p> <p>②2年次生12名、過年度生2名の計14名につき修士論文の提出があり、全員が審査に合格、修了に至った。この点は順調といえる。</p> <p>③指導教員4名体制となり、各々2～6名の学生を担当した。いささか不均衡であり、対策を考えたい。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①上記の③に関連するが、留学生を含め、日本語学及び日本語教育学を志望する学生が大半で、指導教員数との不均衡がある。人員配置を再考されたい。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①平成25年度在学学生26名のうち、日本人母語話者学生は4名のみである。一概に留学生を問題視するのではないが、専攻の性質上、日本人学生の存在は不可欠であり、対策が必要である。ただし、近年、留学生の大半は、生活態度などに大きな問題はなく、危惧されるのは、日本語・日本文化に関する全般的な知識不足である。</p> <p>②留学生に対しては入学当初から、論文のネイティブチェックを依頼できる日本人を確保するように促してきたが、成果のほどは疑わしい。教員個人の添削には限度があり、対応を考える時期でないかと思われる。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>専攻としての、独自の活動は、現在までできていない。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>日本語・日本語教育学科の協力のもとに、可及的速やかに、全国組織である日本語教育学会の大会あるいは研究会などを招致したい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>教員の適正配置を願う。平成26年度は修士論文担当者が他の校務との関係で3名になり、指導の負担が増大しそうである。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>厚生労働省の教育訓練給付制度の指定講座として認定を受けることができた。平成26年度入学生より適用され、一定の社会人経験を有する学生は修了後に教育訓練給付金の支給を受けられることになった。社会人学生確保の追い風としたい。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>修了生の進路について、全学的視野で理解を求めたい。帰国する留学生はそれぞれ進路を開拓しているが、日本人学生の国内での就職については、ほとんど無力である。学外での非常勤講師の経験豊富な社会人修了生に、学内のしかるべきポストを、有期雇用であっても非常勤であっても用意してやりたい。これが、日本人学生志願者の増加に結び付くのではないかと期待している。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	中国・韓国言語文化専攻
項目	自己評価		
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①中国言語文化分野と韓国言語文化分野とに専門分野を分けながらも、東アジアを視野に院生が学習・研究できるカリキュラムが構成されている。平成25年度も東アジアを視野にした学位論文が作成された。</p> <p>②中国言語文化分野と韓国言語文化分野とに専門分野が分けられていて、それぞれ異なった学位が取得できる(修士(中国言語文化)、修士(韓国言語文化))。平成25年度もそれぞれの分野の学位が授与された。</p> <p>③現地に赴いて事象の理解を深め、資料を収集する「臨地研究」の科目の充実が図られている。平成25年度も当該科目の履修があった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○中国言語文化分野と韓国言語文化分野のそれぞれの自立と協力体制の充実・発展方法を講じたい。</p>		
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①修士論文を2名が提出し、2名が修士の学位を取得した。</p> <p>②両分野共に、留年する大学院生を抱えている。</p> <p>③中国の協定校から交換留学生枠で大学院生1名を受け入れている。</p> <p>④韓国に交換留学生枠で本学の大学院生1名を新たに派遣した。</p> <p>⑤「論文指導演習」は1年次・2年次生が同一時間に履修できるようになった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①大学院の交換留学制度を充実させる。</p> <p>②他大学大学院で行うように、同一名称科目を連続して履修でき、単位取得できるようにしたい(毎年内容が変わるので可能)。</p>		
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①日本中国語教育学会、日本韓国語教育学会の大会、研究会等において、本学教員が中心的役員として活動した。</p> <p>②各種学会、研究会において、本学教員が役員として活動し、学会をリードしている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①平成26年度も本学を諸学会・研究会の会場として対応することになる。その際には有効な大学院生の協力体制を作ることが求められる。</p> <p>②国際的な研究者交流を考えたい。</p>		
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①中国言語分野、韓国言語分野ともに、博士課程を修了、または満期退学して、識見を有する教員で構成されている。</p> <p>②中国言語分野、韓国言語分野ともに、科研費にも応募して、活発な研究活動を行っている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①若手の研究者たる大学院生が、将来博士号を取得するように働きかけていく。</p> <p>②大学院担当教員が、教育から研究に力点を移せるようにマネジメントすることが望まれる。</p>		
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①専攻として定員割れを起こしている。中国言語文化分野、韓国言語文化分野共に志願者が少ない現状がある。</p> <p>②韓国言語文化分野は学部には優秀な学生を有しながら、博士課程がないことから、本学に進学せず他大学大学院に進学する例がある。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①定員対策からも、中国言語文化分野、韓国言語文化分野の分離を想定する時期であることも考えられる。 (有効にインターネットの検索にかかる方策が求められる)</p> <p>②博士課程の設置を望みたい。 (優秀な人材が他学に流れるのを防ぐとともに、博士号取得を目指す優秀な人材を修士課程段階から本学に呼び込むようにする)</p>		

(1) 特筆すべき事項

【教育課程】

- ①計画通り実行され履修状況も良好である。教育の目的に応じて、毎年、教育課程や内容をカリキュラム委員会を開催し検討している。
- ②長期履修制度は2～3人の応募者があり、指導計画も定着しつつある。
- ③倫理審査委員会の開催時期に合わせて早期から指導が行われるようになり、1年次に全員が倫理申請することができた。

【入学選抜と学生指導】

- ①一般・社会人を対象に実施し、平成25年度は5期生14名の学生を迎え入れた。内訳は医療施設の看護管理者、看護教員といった職域は変わらない。年齢的には中堅・管理クラスの学生を多く受け入れている。また応募者は、修了生、在学生の推薦、紹介及びホームページ閲覧をきっかけにしているケースが増えている。
- ②入学時より論文指導教員と他教員によるチームティーチングにより、計画的な論文指導が行われている。平成25年度は長期履修生を除く予定者12名全員が学位を取得した。

【社会貢献】

- 大学院と国立病院機構埼玉病院の共同研究4年目として、和光朝霞地区にがんピアサポーターの養成を実現すべく、基礎調査を開始した。

【組織マネジメント】

- ①教員組織の充実を図るため、退職者の後任として非常勤講師1名（ウイメンズヘルス看護学分野）を採用した。
- ②本年度で退職するマネジメント看護学分野の後任は採用しない。
- ③教員任用や論文審査など透明で公正な運用を図り、研究科内で情報を公開する。

(2) 今後の課題

- ①平成26年度重点課題として、看護マネジメント分野の教育内容、教員の配置についてカリキュラム委員会を開催する。
- ②社会人学生に対応したフレキシブルな授業時間を実現する。
- ③学部卒業生への広報活動や受験応募者を対象とした公開授業を行う。
- ④医療マネジメントと看護の大学教育に携わる人材育成を喫緊の課題として、カリキュラムの検討を行う。
- ⑤看護系大学院修士課程のコアコンピテシー目白版を検討する。
- ⑥修了生アンケートの回答に博士課程設置の希望が出されている、実現化するための方策を検討する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	看護学専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 2年次生12名が修士論文及び最終試験に合格した。</p> <p>② 看護マネジメント分野において、演習から特別研究への連続性を持った指導を行うため、次年度より指導教員全員が演習担当をすることを決議した。</p> <p>③ 聴講生制度開始のための教科目検討、及び手続きを行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○ 修了生から英文講読での基礎的な学習強化の要望があった。中長期にわたるカリキュラム検討の際に、見直す視点としてあげられた。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 修了生が関連学会で研究成果の発表、及び学会誌投稿を行った。</p> <p>② 倫理審査委員会が年4回しかないため、学生の研究計画書への取り組みに向けての指導を強化した。</p> <p>③ 1期～4期の修了生を対象にアンケート調査を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○ 入学前からの研究への準備性を強化するためのシステムを検討する（事前相談の広報及び方法など）。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 病院管理での現状及び課題等をテーマに修了生や病院看護職を対象とした大学院授業公開を実施した。</p> <p>② 大学院と国立病院機構埼玉病院の共同研究4年目として、和光朝霞地区にがんピアサポーターの養成を実現すべく、基礎調査を開始した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 授業公開の今後のあり方を検討する（テーマや継続方法等、卒業生や実習施設看護師のニーズを把握する）。</p> <p>② 共同研究の基礎調査をもとに、ピアサポーター養成支援のための基礎資料作成を行う。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① MU S C 全体の業務の協力体制強化のために、認定コースと事務局と合同会議を月1回実施した。</p> <p>② 学生が仕事と論文作成との両立を図るためキャンパス内での宿泊施設の利用が多くあり、大変好評であった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① パソコンが古いものも多く、立ち上がりに時間がかかり学生からのクレームがあがった。</p> <p>② 研究室のパソコンも古く、学生から送られてくる論文関係のメールを開くのに支障がある等、学生指導等に影響があり学生及び教員からもクレームが出た。特に、教員が学部と大学院との移動に時間がかかるため、効率的に仕事を行う工夫に苦慮している。</p> <p>③ 倫理審査における合否連絡等が遅れ、学生の調査開始に影響があり学生からのクレームがあった。倫理審査における諸連絡等のシステム強化。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 学生確保のために昨年と同様、リーフレットを作成し関連学会で配布した。</p> <p>② 学生募集のために、看護学科実習施設へ出張し、大学院案内等の広報活動を行った。</p> <p>③ 厚生労働省の教育訓練給付講座としての指定申請を行い、認可された。学内手続きとして修了生アンケートを夏から秋にかけて実施した。平成26年度入学者から適用され、一定の社会人経験がある入学者は修了後に教育訓練給付金を受給できることになった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○ 教育訓練給付制度の講座指定、長期履修制度や聴講生制度など進学に有利な条件をアピールし学生募集の戦略を立てる。</p>			

(1) 特筆すべき事項

- ①第1回修了生の論文指導、審査、新宿キャンパスにおける構想・中間・最終発表会の円滑な進行のため、教務委員会を中心に体制作りに努めた。結果として長期履修生を除く第1期生8名が滞りなく論文完成、学位取得を果たした。全員現職者であり、学生自身の努力とともに、精力的に指導を行った論文指導教員の努力を特筆することができる。
- ②1年次生から実質的な論文指導を開始し、プレデザイン発表の機会を秋学期に2回設けて、研究倫理審査への早めの申請が可能となる体制を整えた。本年度は6名が年度内に審査書類を提出できた。
- ③研究科として平成26年度より科目等履修制度を導入することを決定した。
- ④完成年度となり、教員資格審査により平成26年度から理学療法学分野2名、作業療法学分野1名を担当教員に加えた。また研究法に関してニーズの高い質的研究法に関する指導を充実するため、非常勤講師による授業枠を申請し、26年度より実現することになった。
- ⑤博士課程設置検討の基礎資料として、入学者に対するニーズ調査を行い、潜在的ニーズのあることを確認した。
- ⑥秋学期に毎年、公開の研究科フォーラムを実施している。本年度は外部講師2名による講演会「高次脳機能障害とリハビリテーション」を開催した。フォーラム開催に関しては生涯福祉研究科とは相互に協賛とし、授業協力と相俟って連携関係を強めている。
- ⑦受験生の減少、入学者の分野間アンバランスは大きな問題であり、その解消は喫緊の課題と受け止めている。一般的広報活動に加えて、ハビリテーション職者の多い病院・施設への訪問説明会を開始した。
- ⑧日本リハビリテーション連携科学学会15回大会(大会長：齋藤佐和)をリハビリテーション学研究科共催、生涯福祉研究科協賛により、平成26年3月15～16日、新宿キャンパス研心館において開催した。両日で約200名の参加があり、成功裡に終了した。

(2) 今後の課題

- ①入学者減が続き、また作業療法分野が4分の3を占めるという偏りの問題も大きい。平成25年度末から出張大学院説明会を開始したが、この活動をさらに拡大充実させ、3分野からの幅広い応募者獲得に最大限努力したい。
- ②博士課程の存在も修士課程進学の魅力の一つである。修了生、在学生の約3分の1が設置要望を持っており、同様のニーズを持つ看護学科と協力して、医療系分野の博士課程設置のための検討を進めたい。
- ③学部と大学院が2キャンパスにまたがることによる困難の軽減のため、事務局の協力も得て改善に努めてきた。平成25年度も一定の改善が見られたが、なお一層の工夫を要する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	リハビリテーション学専攻
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①2コマ続けての講義・演習を隔週で実施することで、学生と教員の利便を図った。</p> <p>②完成年度となり、教員審査を実施し、来年度から理学療法学分野で2名、作業療法学分野で1名の教員を大学院担当に加えた。</p> <p>③研究法に関する教育を充実するために、来年度から非常勤講師による授業の枠を設定した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○教員審査を実施し、教員の充実を図る。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①2年生の修士論文指導を行った。</p> <p>②構想発表会、中間発表会、最終発表会を行い、長期履修生2名を除く8名が修士論文を提出し、学位を取得した。</p> <p>③1年生は1年次から論文指導を開始し、プレデザイン発表会を秋学期に2回実施するとともに、研究倫理審査への申請を行うことができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○1年次のプレデザイン発表から2年次の構想発表、中間発表、最終発表と順調に移行するよう、1～2年次への論文指導の流れを確立する。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①リハビリテーション学研究科主催の公開フォーラムを開催した。『高次脳機能障害とリハビリテーション』の演題で、外部講師を招聘して実施し、100名を超える参加者を得た。</p> <p>②フォーラムは生涯福祉研究科と相互に協賛しあい、連携を深めた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○リハビリテーション学研究科主催の公開フォーラムを継続して開催し、社会貢献をしていきたい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①毎月、大学院教務委員会を開催した。また、入試広報委員会と合同会議を4回開催した。</p> <p>②年間10回の大学院教員会議を開催した。</p> <p>③来年度から科目等履修生制度を導入することにした。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○リハビリテーション学研究科教授会の開催を検討したい。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①受験生確保、入学者の分野バランスの解消を目指して、リハビリテーション職勤務者の多い病院や施設への訪問説明会を実施した。</p> <p>②日本リハビリテーション連携科学学会第15回大会をリハビリテーション学研究科の共催、生涯福祉研究科の協賛により、平成26年3月15日・16日に新宿キャンパス研心館で開催した。</p> <p>③博士後期課程設置を検討する資料として、入学者のニーズ調査を実施した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○博士後期課程設置を検討する。</p>			

学 部 · 学 科

(1) 特筆すべき事項

1 研究面

- ①平成25年度も、各学科により過年度と同様の研究上の特徴が見られた。学会論文寄稿、研究論文・海外発表などに積極的に取り組む学科（心理カウンセリング）と地域との連携を重視し、教育実践を採求する研究に力点を置く各学科（人間福祉・児童教育・子ども学科）とに大別できる。
- ②科学研究費や特別研究費への応募が増加した。
- ③人間学部の各学科が共通して、地域や多様な教育施設との共同研究や実践研究に取り組んできた。

2 教育面

- ①学生の学習意欲の喚起、授業規律の確立など、授業改善に関わる取り組みは各学科が共通して取り組んできた。主に「キャリアデザイン」の時間を活用した。各学科とも学科会において、授業の改善に関わる論議の場を設定している。
- ②行事を指導の柱とする学科、教育現場への参加の重視、地域連携・ボランティアの奨励など特色ある教育活動が展開されてきた。子ども学科及び児童教育学科では、まみむめめじろ、大学祭、グループプレゼンテーション、田植えなどの身体性を重視した行事を企画・実行している。
- ③各学科とも、学級担任の業務の確認、ゼミ指導など、きめ細かな学生指導などに積極的に取り組む姿勢見られた。学科ごとにベーシックセミナーの持ち方、ゼミ指導等について毎回の学科会で論議している。個別指導・個別面談を行ってきた。

(2) 今後の課題

- ①学部教授会の設置に伴う対応が基本的な課題となる。平成26年度の具体的な課題は以下の通り。
 - 1) 学科間の連絡・調整・情報の交換、学内各組織と学科の活動との連携を進める。
→教務委員会を中心とした学部共通科目の見直しを進める。資格支援センターと連携して特別支援教育免許状取得に向けての取り組みを開始する。
 - 2) 国家試験対策を重視し、合格率を高める。採用試験対策を強化する。
→人間福祉学科では社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士、子ども学科では保育士、児童教育学科では小学校教員の採用への合格率を高める。心理カウンセリング学科では、将来の「公認心理士」免許設置の動向に向けた対応策を検討し、実施する。
 - 3) キャリア教育の充実
→初年度教育から卒業後の進路に向けて個々の学生への個別指導を重視することを4学科共通の対応策とする。
 - 4) 設置する科目・科目数の各学科の教務委員等による検討の具体的推進。
→4学科の教務委員によるワーキンググループを設置し、平成26年11月を目途に4学科の設置科目の見直しを進める。
 - 5) 地域の教育委員会との連携を促進する。
→心理カウンセリング学科・人間福祉学科は新宿区教育委員会と児童教育学科は中野区教育委員会と連携した活動を展開している。子ども学科は都内及び近隣のさまざまな地域、教育施設と協働している。これらを関連させ、目白大学人間学部として、地域教育への貢献、多様な教育資源の活用による本学教育の有効な促進を図る。地域との連携は本学の教育活動への理解を深める機会となるばかりでなく、学生の将来の進路選択への有用な手立てと認識している。
 - 6) 多様な教育資産の開発・活用も共同で進める。
→学部教授会において、4学科の教育活動やその特質を報告する機会を設定する。このことを通して、人間学部として各学科の教育資産の活用を促進する。
 - 7) 学科連携のための話し合いの場の設定を進める。
→平成26年度春学期においては、各学科の教務委員、入試広報委員の共通理解を将来に向けての話し合いの場を設定する。秋学期においては、キャリアセンター委員の論議の機会を意図的に設定する。年間を通して順次こうした役割分担に対応した論議の場を設置する。学部教授会において、適時報告・提案を行い、学部全体としての共通理解を深めていく。
 - 8) 本学人間学部に通じた、学習方法の改革に取り組んでいく。
→平成26年7月までに各学科のFDの取り組みを明確にする。FD委員及び教育研究所の協働により、人間学部としての学習方法の改革を進める。参加・協働・探究・対話型授業の方法を研究していく。また、将来の進路にかかわる技能を習得させるためのスキル教育についても検討を進めていく。

②教育課程の内外における社会的・職業的自立の重視

大学教育の新たな方向として「課外のさまざまな指導を通じて有機的な関連」が示されている。この背景には、「学びから就業への円滑な移行ができていない」現状の改善が大学教育の緊要の課題となっていることがある。

「課外のさまざまな指導を通じて有機的な関連」を考察するに、知識基盤社会から要請されている、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」を育成するために、大学教育のあり方を改善する必要性を示唆していると受け止めることができる。さらに多文化共生社会への対応についても重視していく。

それは、大学内部における教育活動全体及び授業の改善を図ること、それに加えて大学を中心としつつ多様な教育資源の活用、さまざま教育機関や地域とのネットワークの構築の必要に収斂できると考える。これらを次年度も鋭意具体化し実践していく。

③教員の研究・研修を奨励する。

学会・研究会への参加、論文作成を奨励し、その成果を報告・発表する機会を作る。本学における学会・研究会開催を積極的に展開する。こうした研究・研修活動により、教育実践者としての各教員の資質・能力・技能を高める。また、多様な教師スキル習得の機会とする。

上記の具体的な課題の対応策としては、学部教授会においてできる限り開放し、人間学部教職員の共通理解を深めていく。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	心理カウンセリング学科
--------------------------	----------	--------------	-------------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項 予定通りに外部講師による学科講演会を2回実施した。 ①7月「自分を磨く就活入門」(酒井泰葉・目白大学卒業生) ②2月「認知行動療法は何故ユーザーに受け入れられたか」(北海道医療大学心理科学部教授・坂野雄二先生)</p> <p>(2) 今後の課題 ①精神保健福祉士資格が学科単位での申請となったため、今後、心理カウンセリング学科として当該資格の継続について検討する必要がある。 ②次年度以降も在学生対象の学科講演会を年2回開催する。 ③外部実習授業(ピアサポート)は以前は中学校及び小学校で実施していたが、現在は小学校のみで活動している。大学生レベルの実習では小学生対象が適切と考えることであるが、履修人数によっては今後再考する必要がある。この授業は、地域への貢献も含め重要な授業と考えている。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項 論文発表は27件であり昨年より減少したが、書籍出版18件と多くなっていた。</p> <p>(2) 今後の課題 ①論文発表をさらに増やすよう努める。 ②外部研究費はある程度獲得しているが、さらに補助金等を得て研究活動を活発に行う。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項 ①学科卒業生の就職率の目標を80%としていたところ、実績は85%となり、昨年度の77.8%よりも向上した。学生及び教員の努力とともに、社会経済状況の好転も影響していると思われる。 ②一方4年で卒業できない学生も依然多い。過年度生数の目標を今年度20名以下とした。昨年度の実績は17名であったところ、今年度11名であり目標は達成できた。</p> <p>(2) 今後の課題 ①就職状況は改善してきていると言われるが、今年度はさらに就職率90%を目標とする。早い段階より就職への意識付けをさらにしていきたい。特に、2年次のキャリアデザインから3年ゼミ指導において、さらに積極的な就職指導をしていく。 ②過年度生数の総数をできれば10名以下にする。必修科目であるベーシックセミナー、及びキャリアデザインにおいて出席状況の良いくない学生に早期に指導するよう心がける。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項 ①例年通り新宿区と提携して、学部学生が区内小中学校に赴き、ピアサポートとしてスクールカウンセリングの補助を行い、学校現場に寄与した。 ②新宿区特別支援教育事業で巡回指導を行った(専任教員3名)。</p> <p>(2) 今後の課題 ①上記ピアサポート授業を継続する。 ②新宿区特別支援教育事業で巡回指導を継続する。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項 今年度は特記すべき事項はない。</p> <p>(2) 今後の課題 ①平成26年度より学部別教授会となるので、より一層教授会の運営に関わるように努める。学部単位の運営に合わせて授業科目編成の検討を始める。 ②教員の健康問題が続いており、学科教員の健康管理及びそれに伴う授業管理を適切に行うよう努めたい。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項 特になし</p> <p>(2) 今後の課題 カウンセラーの国家資格として「公認心理師」の法案作成が進展しているようである。資格として認定された場合、学科カリキュラムの変更が必要となる可能性がある。情報を収集し、適切に対処できるよう準備をしていく。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	人間福祉学科
--------------------------	----------	--------------	--------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○教員のさまざまな努力や工夫により、学生の教育力向上の授業努力が行われた（いくつかの例としては、座席指定制、ビデオなどによる映像の活用、プリントの配布やパワーポイントなどの活用、現場の実践者を講義に招聘するなどの工夫が行われている）。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○新しい福祉士制度の最初の学年（4年前の国家資格制度法改正に伴う新カリキュラム導入年度生）が卒業し、この4月から専門教育科目の一部取得年次の変更や実習に関するカリキュラムの変更という学科独自のカリキュラム改革の新たな1年目を迎えた。この改革は、学生の学習進度に対応した学習の効率化と実習を通して専門的な学習効果を高めることを目指しており、今後、結果として国家試験の合格者の増加のための方策につなげ検討したい。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○教員の研究活動が徐々に活発になり始めており、科研費、大学特別研究など積極的な研究費の採択を目指したチャレンジを進めており、その結果として、若手の教員を中心に研究費の採択も増え始めている。平成25年度は本学科教員から科研費4件（新規3件を含む。前年度は継続1件）、特別研究費6件（前年度は2件）が採択された。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①若手の教員には大学の特別研究費や科研費の申請、研究の学会発表などに関して、徐々に増えてきており、科研費の採択も増加してきているが、引き続き採択数の増加等に向け学科会議などの機会に情報提供を行っていききたい。</p> <p>②地域との連携や共同研究などが徐々に教員によって実施されてきているが、さらに教員間の専門性を発揮した研究、外国（例えば韓国など）の大学との共同研究など、今後学科として積極的に推進していく。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①1年におけるベーシックセミナーが徐々に成果を見せており、学生に対する個別的な相談体制が確立されてきている。</p> <p>②2年次のキャリアデザインでは、学習面での不安を持った学生や科目履修の不審な学生への直接的な指導は十分に行っている。不本意入学などによる大学への不登校状態の学生の増加については、親への連絡や本人の呼び出しなどで個別学生の把握を行っている。しかし、結果として進路変更という結論に達することも多く、退学する場合も見られる。</p> <p>③3年及び4年は、専門セミナーや卒論ゼミという集団で個別的な学生の状況を把握し、就職などに関する進路及び個別的な支援を行っている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①3年及び4年次における学生指導の充実のため、また教員間の情報交換の緊密性をより高めるため、学科内FDをどのように具体化していくか検討する必要がある。</p> <p>②新カリキュラムの完成年度以降、合格率の低下傾向に対して、国家試験についての新たな指導方針を立てるとともに、合格に向けた検討を進める委員会の設置を具体化していく。なお、国家試験の合格者数の増加に必要な内容の検討とともに合格目標と言った数量的な検討も合わせて検討していく予定である。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学科教員が、国レベル、地方レベルを問わず各種委員会の主要な役割を果たしてきている。</p> <p>②個々の社会的貢献の細目には反映されていないが、大学院などのシンポジウムなどでの関わり、公的及び民間の各種研修事業・専門職養成に関連した講義や講演活動により、大学及び学科の紹介などの役割を果たしてきている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○学科として地方自治体との協力関係の形成、関係学会との積極的な役割を教員が担うことが必要である。今年度は、さらに、学会の大会誘致が決定されており、今後の学科として必要なイベントなどを積極的に取り組む契機としたい。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①昨年度は、学科会議に費やす時間が長時間にわたったため、これまでの学科会議介在前に行っていた特別会議を見直し、新たに事前に資料などを準備して、教務（大学全体・学科内に分ける）入試・広報、学生、キャリア委員会を中心に30分程度の時間を設けて実施した。</p> <p>②学科創設10周年の各種事業は、滞りなく終了し、映画会と講演会も盛会で、学科創設当時の諸先生の出席を得ることができた。この記念行事を通して、学科全員が役割分担をこなし、大学からの限られた補助金ではあったが、記念誌などの発行も行うことができ、有効に予算を活用することができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○学科教員の年齢構成のバランスが悪く、今後積極的な若手だけではなく多くの教員が役割を分担して、「社会福祉」業界の冬の時代を乗り越えるべく、入試改革や広報を踏まえた学生募集の検討が必要であると認識すること。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○新カリキュラムの完成年度とその後に向けた「人材育成PT」を設けて、資格取得だけではなく、学科として学生がどのように学び、卒業していくのかという問題の検討を通して、記念すべき10周年の年に教授会の議を経て新カリキュラムの導入を決定することができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学科として、平成25年度のカリキュラム一部改訂を踏まえて、CP(カリキュラムポリシー)の新たな方向性の検討を進める。</p> <p>②10周年の次の一步をどのように歩んでいく必要があるかを考える必要がある。特に、大学における学部単位での教授会体制を踏まえた新たな学部と学科の関係を人間福祉学科として検討する必要がある。そのためには、学科としての独自性と学部の垣根を低くした活動計画や事業計画として具体化できる内容を検討することが課題といえる。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	子ども学科
--------------------------	----------	--------------	-------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①平成27年度に向けてのカリキュラム検討委員会（平成24年度設置）は、より良いカリキュラム作成に向けての議論が進展している。</p> <p>②就職率は例年99%近い。社会の要求に応えるべき養成校としての使命を自覚し、今後もこの成果を継続させる。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①理論と実践に強い保育士・幼稚園教諭・施設職員の育成を目指し、より一層、教員間の連携が望まれる。</p> <p>②今年度から一般入試で面接を実施したが、合格基準の設定と人物の見極めが今後の課題として残った。</p> <p>③児童教育学科と共用しているピアノ練習室は学生の学習意欲を増進させるためにも施設の増設が望まれる。また、ピアノ練習室の学生による適切な使用を徹底することも、学科としての教育上の課題である。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①平成25年度の学科所属教員による科研費採択実績が新規採択2件（前年度1件）、継続採択2件（同1件）と向上した。</p> <p>②「コラボさいたま2013」と「彩の国ビジネスアリーナ2014産学連携フェア」の両産学連携イベントに、学科所属教員が自身の研究テーマを出展した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①若手研究者による科学研究費申請の奨励を続ける。</p> <p>②学科内での特別研究費対象の研究を引き続き奨励する。</p> <p>③養成校での産学連携は難しいが、一部それに近い研究があるので奨励する。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①保育士・幼稚園教諭の養成校であることから、常に社会的マナー（TPO）の指導を実施している。</p> <p>②自主的な活動である子ども学科特別行事（まみむめめじろ かきくけこども）を、平成25年度も12月に実施した。学生の問題解決能力などを養成できる重要な行事として定着している。</p> <p>③教員の自発的協力を得て、4号館前で挨拶運動を実施してきたところ、学生への教育的効果が認められている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①教員に対する社会的マナー（TPO）の指導、また学科特別行事・教科における学科内行事への教員間の認識差を解消して積極的な参加をどのように促すかが課題である。</p> <p>②学生の個人的な指導の充実をいかに実施するかが継続的な課題となっている。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教員はそれぞれの専門分野において、各地域で講演会、相談など社会貢献をしている。</p> <p>②7月に毎年恒例の学科主催公開講座「これからの子どもの育ちを考える～命とのかかわり～」を実施した。旭川市の旭山動物園の前園長を招いての講演と鼎談を行い、社会一般の方々、子育て中の保護者、卒業生など出席者の好評を得た。</p> <p>③12月に実施した学科特別行事「まみむめめじろかきくけこども」は、今年度も近隣の保育所、幼稚園、施設の子どもたち、それに保護者の参加があり、高い評価を得た。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○近隣の保育園幼稚園への社会的貢献が大きい特別学科行事は、教科ではないため、全教員の協力と理解が必要である。また、実施時期をどうするかが近年の課題となっている。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○学科会議の定例化、教員出勤時の押印、挨拶運動への協力などは、今年度も比較的協力が得られた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①ベーシックセミナーとキャリアデザインにおける専任教員の配置が課題である。ダブル担任制の導入を検討していたが、新任者をベーシックセミナーの担当者とすることで課題は解決した。</p> <p>②非常勤講師の多い学科なので、4月はじめに非常勤講師の方々から目白大学の教育環境、学生の状況についてできる限り話を聞いて、今後の学科運営に活かしたい。</p> <p>③平成26年度は新任教員が多い（准教授1名、講師2名、助教3名の計6名）、学科としての新しい体制を整えることを目指したい。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○今年度も、「子どもと自然」を他大学の養成校との差別化を図り特色ある学科とするための重要な科目と捉えて重視した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①子ども学科の将来に向けての発展と強化のために、特色ある学科作りの検討は必至である。特に、現在実施している「子どもと自然」は小動物や草花の飼育栽培等他大学に類を見ないカリキュラムであり、他大学の養成校との差別化を図るためにも、今後も活発な指導体制で臨む。</p> <p>②「子どもと自然」の授業を実施するにあたり、休日の施設貸出し日などに伴う諸問題があり、エクステンションセンターとの連携が教科の運営上大きな課題である。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	児童教育学科
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教育における現場性と身体性を重視し、各種教育施設訪問、国際NGO訪問、教育研究会で実践研究を進める実践研究者を招聘した授業、グループ研究、フィールドワークなどの多様な学習活動を展開してきた。</p> <p>②児童教育に関わる専門家の育成を指向する学科として、児童理解、各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習・特別活動などについて、それぞれの目的と特性に応じ、理論的理解と実践力の向上を目指した教育を展開してきた。</p> <p>③対話力の重要性を共通認識し、対話型授業を各科目の指導において意図的に展開してきた。</p> <p>④児童教育の専門家として重要な創造性や感性を高める教育として、体育、美術・音楽教育、演劇教育に取り組んできた。</p> <p>⑤平成25年度は教員採用試験の結果で教員採用者26名となり、多大な成果を収めた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①平成26年度も、教職希望者への受験対策、教職外の進路希望者への基礎的学力の向上など、学生の進路に対応した教育の推進の具体策を検討し、実施していく。</p> <p>②教師養成塾、教員採用研修などの最近の各都道府県の施策に対応した学内・学科内対応策を具体化していく。一例として、学生の受験先に応じた論作文対策と個別の添削指導を充実させることなどを検討したい。</p>			
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①科学研究費1件（研究代表者1、研究分担者1）、学内特別研究費5件を受給することができた。</p> <p>②本学紀要に論文5件が掲載できた。</p> <p>③6件の学会発表ができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①科学研究費への応募、本学特別研究費の応募数の増加を目指す。</p> <p>②学会誌、本学紀要へのできるだけ多数の掲載を目指し、その過程で所属教員の研究者としての力量の向上を希求する。</p> <p>③教員養成、教育制度、学習方法など、児童教育学科ならではの研究について学科所属教員による共同研究を推進し、学術文献助成を得て刊行する。</p> <p>④学科構成員の研究・実践を共有するための学内FDを推進していく。具体的には、学科内での授業研究会、年度末反省（授業、学科行事等の教育活動）、国際NGOや福島県被災地の学校訪問等の研修会を行ってきた。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①一人一人の学生の学習・生活状況の把握に努めてきた。このためクラス担任、ゼミ担任による個別面談、グループ面談（昼食会）を実施してきた。また学科会では、学生に関する話し合いの時間を設定し、個々の学生について学科の教員が共通理解し、また学習状況や生活態度等の問題に協力して対応する体制を作ってきた。その成果は上がっている。</p> <p>②学生の社会参加能力を高めるため、ボランティア活動を奨励し、学科組織に担当者を置き、紹介・活動の実施・事後の成果の集約が円滑にできるようにしてきた。その結果、学校での学習支援ボランティアや夏季キャンプ活動におけるボランティア参加者が増えた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①現代の学生は人間関係に苦手意識を持ち、刹那的傾向があり、興味・関心も多彩である。こうした多様な学生たちに社会規律・授業規律を定着させるとともに、その良さを引出し、児童教育の専門家として、人間的基盤を広げるための具体的手立ての検討と実施が課題である。非常勤講師とも密に連絡をとり、厳しい指導の中でも学生の努力を認め励ましてきた。その結果が、教員採用試験の合格率や国立大学大学院進学などに結びついたと考える。さらに、地道に指導を進めたい。</p> <p>②非常勤講師の先生方とも共通認識を深め、協同して学生指導を進めていく。このため、非常勤講師の先生方との懇談会を持つ。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○各教員の特性を活かし、平成25年度も文科省・国立教育政策研究所関連審議会委員、区教育委員会教育委員、教科書採択検討委員等を担うなど、地域・社会に貢献する活動を行ってきた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学科所属教員の社会貢献活動を本学の教育、殊に児童教育学科の学生の指導に資するための方策を検討する。小中学校の現職教員の研究会等での貢献活動で築かれたつながりから、本学科の授業に外部講師として協力していただいたが、そのような協力関係を重視する。</p> <p>②各教員がさまざまな教育機関との協同研究に得た成果を学科全体で共有する機会を設定する。具体的には、学科FDとしての報告会を開催する。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学務運営委員会、教務、入試広報、学生、キャリア、図書各委員会の内容について学科会で必ず報告し合うようにしている。また学科としての要望事項については、事前調整を行っている。資格支援センターとの間で教員免許更新制度、実習関係の連絡・調整に努めてきた。</p> <p>②平成25年度秋学期に、専任講師がうつ症状によって休職するという問題が生じた。何時間かの授業休講が生じたため、学生の不安を取り除くための配慮を他の教員で行った。卒業研究の仕上げの指導は、他の教員が代行した。また、休職者の業務についても他の教員で代行した。休職者の家族とは、職場復帰に向けて話し合いを継続した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学科の教育活動や業務について全教職員が認識し、共通意識を持って推進していく体制作りをいっそう進めていく。学部教授会での4学科報告会での相互理解を深め、学科の教育に反映させていく。</p> <p>②学科教員の健康状態を十分に顧慮した学科運営を進める。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①中野区教育委員会との提携により平成25年度も小学校観察実習を推進できた。</p> <p>②学科新聞を継続的に刊行してきたが、従来の教員主体での発行体制から学生の編集員主体で発行できる体制になった。</p> <p>③教育現場の実践者を招聘し、学生の啓発に活かしてきた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①平成26年度からの新カリキュラムの実施に向けて調整を進める。具体的には、新科目であり、また学科全教員のオムニバスである「社会規範とルール」を充実させる。スポーツ・芸術科目における感性教育の機能を高める等の課題がある。また、科目の読替が必要になる場合もあり、2年次生以上の学生への細かな配慮が必要である。</p> <p>②各都道府県の教員採用の現状をできる限り正確に把握していく。このことにより広範囲の教育採用試験に対応していく。</p>			

(1) 特筆すべき事項

<教育>

1. カリキュラムに関して、社会情報学科では科目の順次制に即した新しいカリキュラムを完成させた。また、ベーシックセミナーの開講にあたり、3学科ではアクティブラーニングを取り入れるなど独自の工夫がなされた。
2. 社会情報学科ではフォローアップセミナーで入学前後の教育に力点が置かれ、メディア表現学科ではインターンシップの会を充実させることによって卒業教育に苦心がなされた。地域社会学科ではフィールドワークを通して在学生の興味関心を引き出す創意工夫がなされた。3学科それぞれの特性を生かした教育実践が行われた。
3. 卒業研究に関して、3学科ともに必修であるが、卒業論文の質的向上と公正な評価を行うための卒業研究手順（例えば、研究計画書提出、中間発表会・審査会、卒業研究発表会・審査会、優秀者発表会）の検討がなされ、それらを学生に周知し、適切に実施された。

<研究>

1. 論文数（学会誌、紀要、その他）を平均すると、3学科ともに、1教員が1篇以上の論文を公表していることになる。特に、社会情報学科とメディア表現学科では学会誌に多数の論文（17篇及び29編）が掲載されており、学会発表件数も1教員あたり1回以上の発表件数になる。また、科学研究費等の獲得も積極的になされるなど、研究に対する前向きな姿勢が示された。
2. 社会情報学科とメディア表現学科では全教員による書籍を刊行（『社会をデザインする』及び『メディアと表現』）し、授業テキストとして利用された。研究と教育の連携がなされた。

<学生指導>

1. 成績不振等の学生について、教員間の情報共有と保護者への連絡と面談が積極的に行われ、教員－学生－保護者の3者関係の円滑化が図られた。
2. 社会情報学科では、3年及び4年次生を対象に毎週「就活相談会」（キャリアカウンセラーとの面談）を実施し、4年次生には毎週「オススメ求人リスト」をゼミ時に配布するなどにより、内定率92%の好成績を上げた。また、資格取得希望者への受験指導と集中講座を実施し、秘書検定、販売士、フードスペシャリストなどで多くの合格者を出すことができた。
3. メディア表現学科では学生フリーペーパーコンテストに参加し、地域社会学科では迷惑行為・マナー違反の学生に対する教育的指導を行うなど、教員による積極的な指導が工夫されていた。

<社会貢献>

1. 3学科6～8件の学会・協会役員等に関わっており、広く社会活動を行った。
2. 3学科では地域連携事業及び社会貢献事業（講演講師、大学周辺地域及び市町村への支援など）が積極的に行われた。
3. 産学連携事業は数件づつではあるが、3学科共に行われた。

<組織マネジメント>

1. オープンキャンパス及び学びフェスタでは、3学科の学科長及び入試広報委員が中心となり、学部・学科紹介のパンフレットを3学科共同で作成し、当日に配布することで受験生に学部及び学科の認知を高める効果があった。
2. 3学科共同で非常勤講師と専任教員との教育懇談会と講演会が開催され、学生指導や教育方法の諸問題が論議された。
3. 学科運営に関しては、社会情報学科ではFD研修会等への積極的な参加を促し、メディア表現学科では学科内でのワーキンググループで諸問題の改善に対処し、地域社会学科では学科内での諸活動をまとめた『地域社会学科年報 第5号』を発刊するなど、各学科でそれぞれ個性的なマネジメントが行われた。

<その他>

1. メディア表現学科では目白大学新聞の発行・めじてれびの制作・公開講座の実施などにより、地域社会学科では学科紹介パンフレット「地域密着で学ぶ 社会で生き抜く力」を作成・配布するなどして、学生や保護者との連携に努めた。

(2) 今後の課題

<教育>

1. 基礎学力の向上と専門科目への主体的な関与を高めるための動機付けの工夫（教授法の改善など）が必要である。
2. 学部共通科目の改善を図り、効率的な学習と社会学部の特性が反映されるカリキュラムを検討する必要がある。
3. 卒業研究の質的向上と学科間の情報交換のために「社会学部卒業研究発表会（各学科の優秀論文発表会）」などを開催し、良い意味での競争原理を導入したい。
4. 社会学部内の資格取得が円滑に行えるように学科間の連携を円滑にする。

<研究>

1. 研究成果を上げるために、教育と研究に費やす時間と労力のバランスを改善するための方策を検討する。
2. 外部資金獲得のためのさらなる積極的な申請体制を整備する。
3. 学会誌投稿、学会発表などがスムーズに行える研究環境（時間と経費）を整備する。

<学生指導>

1. 成績不振等の学生については、当該学生の早期の発見、保護者との綿密な連絡・連携などの工夫をして、休学、退学、除籍学生などの減少を目指す。
2. 就職の内定率向上のために、キャリアカウンセラーの積極的な活用とゼミ教員による個別の学生との面談を促す必要がある。
3. 社会人としての言動（礼儀やマナー）や主体性、ボランティア精神などを身につける機会を提供する。

<社会貢献>

1. さまざまな形での社会貢献が実践されているが、社会学部内のマンパワーを活用するために、学外からの多様な要請に円滑に対応できるような組織・機関（研究センターなど）を設置したい。
2. 社会貢献に関連した業務等に対するサポート体制を検討したい。

<組織マネジメント>

1. 学部長と3学科長との意思疎通とさらなる連携を強化する必要がある。
2. FD研修会、全学的な講演会への積極的な参加を促す。
3. 社会学部非常勤講師と専任教員による教育懇談会を活性化する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	社会情報学科
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①「学びのフレームワーク」を作成し、AP・CP・DP、科目の順次性に即したカリキュラム（平成26年度から）を完成させ、スタートへの準備を完了した。</p> <p>②AP・CP・DPを再検討した。</p> <p>③ベーシックセミナーを開始し、学科に即した内容の検討を実施した。</p> <p>④「卒業研究」の合否判定に新たな工夫を加え、運営の改善に努めた。</p> <p>⑤アクティブラーニングを積極的に取り組む教員が見受けられた。</p> <p>⑥フォローアップセミナーを開催し、文脈を読みとる方法、新聞の読み方を指導し、一般入試過去問の解答と新聞記事要約を他日提出させ、評価した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①平成26年度から導入する新カリキュラムの円滑な運用と教育効果を検討する。</p> <p>②「卒業研究」の質的向上と公正な評価方法をさらに検討する。</p>			
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教員スタッフの研究成果が上がった。論文数は17件、図書の刊行は23件、学会発表件数は12件であった。</p> <p>②科研費の給付を受けている教員は、新規採択2件、継続採択4件、申請中のものは3件であった。</p> <p>③学科誌『ソシオ情報シリーズ』第12号「放射能への恐怖」、第13号「社会をデザインする」を刊行し、第12号は7名、第13号は13名の学科教員が寄稿した。</p> <p>④社会問題や社会調査の分析と提言、また文献資料の解説や情報機器を使って現地調査に取り組む教員が多く見受けられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・桐和祭社情講演会「産業界の新しい芽を探る」（池田泉州キャピタル代表取締役・神保敏明氏）を開催した。 ・シンポジウムのパネリストやフォーラムのコメンテーターとして活躍したものがあつた。 <p>(2) 今後の課題</p> <p>①教員にとっての十分な研究活動（学会参加・論文作成）の実現を期したい。</p> <p>②対外的研究資金のさらなる獲得を目指し、研究活動の充実を期したい。</p> <p>③教育活動に時間が割かれる現状があるが、効率的な学科運営を図り、研究活動の充実を期したい。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①問題のある学生の学科内での情報の共有により、適切な指導ができた。</p> <p>②成績・出席不良学生には、クラス・ゼミ担任のコメントつき成績表を保護者宛に送付した。</p> <p>③3年次の後半より就活相談会を週1回実施し、「内定がとれそうなオススメ求人リスト」を週1回発行した。</p> <p>④就職内定率は92.0%（3月31日現在）であった。内定率向上のためのキャリアカウンセラーとの面談を学生に勧め、保護者会では保護者のための就活相談会を開催し、ゼミ担当者による保護者面談を行った。</p> <p>⑤諸資格取得希望者への受験指導と集中講座を実施した。秘書検定2級27名、販売士2級3名、フードスペシャリスト検定16名が合格した。</p> <p>⑥修学意思の不明学生を皆無にした。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①在学生の主体的な学習意欲の向上を目指す指導を推進する。</p> <p>②リーダー学生の育成のさらなる向上を目指す。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①公共性のある講演・マスコミ取材に多く応じる教員がみられた。</p> <p>②学会役員等を引き受け、社会貢献事業に携わる教員も多かった。</p> <p>③エクステンションセンター等の公開講座を担当する教員が見受けられた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①社会に提言していく場として、社会学部研究所（仮称）の設立構想に着手したが、この実現の可否を検討したい。</p> <p>②学生の教育効果とも連動した、社会的な学習成果を社会貢献する視点から検討したい。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①FD研修会には3回とも助教以上ほぼ全員が参加した。</p> <p>②学科内の共通課題認識、課題定期を得るために、『ソシオシリーズ』刊行を続行した。</p> <p>③オープンキャンパスのための学科PR内容を刷新した。</p> <p>④第2回社会学部非常勤講師との教育懇談会を開催した。非常勤講師の中から中村正子氏が講演「ゴミ問題を考える」を実施した。学科教員は全員、学科所属の非常勤講師は懇談会に4名、講演会に3名出席した。</p> <p>⑤新カリキュラム検討チームを学科内に設置し、平成26年度からの円滑な運営を検討した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①FD研修については、学科内の取り組みを再組織したい。</p> <p>②教授会等、学部中心の大学運営の改革に連動した学科の組織運営を検討したい。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学科の全般的な活動において、大学全体の方針や運営に則しつつ効率化・適正化を検証し、機動的かつ柔軟な学科運営を目指したい。</p> <p>②学科教員の役職構成がやや教授職が多く、定年教員等の後任人事等において、適正な構成を目指したい。</p> <p>③学科の全般的な運営について、より透明性が高く全構成員が課題を共有し共働できる体制を促進したい。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	メディア表現学科
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①少人数制でのベーシックセミナーを実施し、きめ細かに新入生の教育に当たった。</p> <p>②学科主催で学生向けシンポジウム『映像表現の現在とこれから』を、3人の外部パネリストを招聘し、開催した。</p> <p>③インターシップの会を継承実施するとともに、新たに成果報告書をまとめ、関係者に送付した。</p> <p>④ケーブルテレビ向け番組を学生と共に制作し、中井・落合地域の振興の一翼を担った。</p> <p>⑤初めて「卒業研究審査会」「卒業研究再審査会」「卒業研究優秀者発表会」を開催し、卒業論文・制作の質的向上に努めた。</p> <p>⑥秋学期に学科教員全員による「メディア表現概論」を設置し、1年生の必修としてメディアをあらゆる角度から分析し、多角的な理解を促した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①各科目間の連携を強化し、学習効果を高める仕組み作りをする必要がある。具体的には「メディア表現演習3」「出版メディア3」「イメージ文化3」などであり、これらの科目については外部講師の有無、集中講義、出張授業、オムニバス授業など、通常の授業とは異なる形式で学ぶ楽しさを学生たちに伝えたく、今後の検討事項となっている。</p> <p>②学生たちに社会学的学術論文の書き方を教え、卒論の質を高めていくことが必須である。</p>			
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学科教員全員による共著作『メディアと表現 情報社会を生きるためのリテラシー』を上梓、各教員の専門分野を著した。必修科目「メディア表現概論」のテキストとしても用いていく。</p> <p>②学会誌への投稿論文数（平成24年度12件→25年度7件）及び書籍発行（同8件→同2件）は減ったものの、学会誌や紀要の範疇に属さないその他の形式での論文数が大幅に増え（同5件→18件）、学会発表も多くほぼ前年並みの件数が行われる（同21件→同20件）など、学科教員の研究・執筆活動は前年度に引き続き盛んであった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学科教員の科研費の獲得が平成25年度は3件にとどまった（前年度は6件）ため、より多くの獲得を目指したい。</p> <p>②研究・教育以外の業務量が多く、研究時間を十分に確保できないでいる状況を改善したい。以前にも増して「多忙感」を抱く教員が多い現状の改善を模索したい。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①全教員が保護者と連携して、登校低迷学生と保護者との特別面談の機会を設け、学生の現状について保護者の理解と協力を促した。</p> <p>②AO入試と推薦入試の合格者を集めてフォローアップセミナーを開催し、学生の学習意欲向上に努めた。</p> <p>③1泊2日の新ベーシックセミナーを横浜で開催、学生たちにフィールドワークを行わせ、iPadを利用して自らの発見をプレゼンテーションさせた。</p> <p>④ゼミでフリーペーパーを制作し、「学生フリーペーパーコンテスト」に応募した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①就職内定率が約80%と他学科に比べて低いので、進路指導を強化し、内定率を上げるよう努めたい。</p> <p>②登校低迷学生に迅速に対応し、退学・休学者の減少に努力したい。</p> <p>③特別な障害を持っている学生への適切な対応を考え、実施していく。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①電子メディア教育の小学校への導入に関し、社会的活躍が目立った。また、ICTマネジメント研修、メディアリテラシー育成と情報モラル教育の推進を行った。</p> <p>②文化財のデジタル化につき一定の貢献をした。デジタル文化財創出機構の100人委員会委員として、文化財のデジタル・アーカイブの推進に寄与した。</p> <p>③所属教員が地域の社会福祉法人の役員を務め、地域の福祉向上に一定の貢献をした。新宿区下落合に保育所を有する社会福祉法人省我会の評議員を務めており、当法人の活動に対するアドバイスを行うことで、大学周辺の地域貢献に寄与している。</p> <p>④外部組織からの依頼により専門地域のアドバイスや講演をし、地域・教育機関の教育的・文化的環境作りに寄与した。一つの具体例として、落合南長崎駅東側にある「トキワ荘通り協働プロジェクト」に参加した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①メディアを専門とする学科として、中井・落合地域のメディア化にさらに貢献していきたい。</p> <p>②学生のボランティア活動を支援し、できればインターンシップ同様、ある条件をクリアした場合は単位を認定するなどしていき</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学科内に小ワーキンググループを課題ごとに設け、小回りのきく体制で学科の抱える問題点をチェックし、できることから改善の努力をした。</p> <p>②「学びフェスタ」で学科の全教員が模擬授業を行い、学科の広報に貢献した。</p> <p>③学科の健全存続のため、入学者が予想される高校に向けた学科独自広報に努め、その結果、志願者増に繋がり、入学者は130人を越えた。</p> <p>④学部での連携業務として非常勤講師の会を開催した。</p> <p>⑤新たに独自の学部・学科のパンフレットを制作し、これをオープンキャンパスなどで配布した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学部・学科の独自の広報予算が削減されたため、パンフや小冊子を作ることが困難になったが、何らかの対応策を立てる必要がある。</p> <p>②学生数だけでなく、質の高い学生の確保に努めていきたい。数は大切だが、やはり質の高い学生を確保し、教育する課程でさらに質を高め、社会に送り出していきたい。そのことが社会的評価に繋がり、引いては入学者増にも関係してくるだろう。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①大学図書館においてミニ展示会「ウィリアム・モリスの『美しい書物』」を開催、公開講座も行い、本学の地域貢献の一助とした。</p> <p>②「目白大学新聞」を2回発行、保護者に発送した。禁煙プログラム参加募集の記事に対して、数名の応募があった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○「目白大学新聞」と「めじてれび」を本学科で制作しているが、諸般事情やこれまでの経緯から考えて、新しい組織作りが必要である。大学全体のブランド力と広報にとっても重要であり、全学的に開かれた体制を構築していくことが急務である。</p>			

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	地域社会学科
--------------------------	----------	--------------	--------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①本学科の魅力である「自ら情報を集め、課題を発見するフィールドワーク」に関し、各教員が独自の専門性を活かしながら創意工夫して、その実施に積極的に取り組んだ。</p> <p>②本学科のもう一つの魅力である授業内容の多種・多様性に関し、講義やゼミ、フィールドワークにおいて各教員が自らの研究業績や専門知識を基に、学生の興味・関心を引き出すような多彩な授業を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①秋学期のフィールドワーク授業実施当日に初めて無断欠席者が出たことに関連して、中には、校舎の外に出るのは「めんどくさい」「積極的に取り組む気にはなれない」「外に出ずに単位がもらいたい」などと話す学生も散見されるようになっている。フィールドワークのあり方も含めて今後どのような対応策を練っていけばよいのかが大きな課題となりつつある。</p> <p>②本学科の学生の学習意欲や理解力、学力レベルといった観点から、授業内容の工夫以外に、今後は良質な授業環境の創出を含めて何らかの対応策が必要になってくるように思われる。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①2人の若手教員の研究及び学内業務における活躍がめざましく、1人は著書本（192頁の単著）を刊行し、もう1人は海外の学会で発表を行った。</p> <p>②平成25年度には目に見える形での成果・業績を書き記すことはできなかったが、各教員がそれぞれの専門分野の研究を深めるため、海外での資料収集や史料・関連文献の読解、学会活動、現地調査等に熱心に取り組んだ。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○特に近年は学内のさまざまな分野でワーキンググループが新たに立ち上げられ、教員各自が役割分担する学内業務が全般的に増加しているため、教員が研究に費やせる時間が減る傾向にある。対策としては、例えば以前のように出講日を週3回に戻して自宅での研究時間を増やす一方、出講日には授業と学内業務にエネルギーを注ぎ取り組むといった「メリハリのある」教育・研究上の環境を整えることも考慮に値するのではないかとと思われる。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①平成25年度に初めて開講されたベーシックセミナーの授業において、教員5名がそれぞれクラス担任として、図書館案内や個別面談を行うとともに、学生生活全般にわたって指導した。</p> <p>②路上喫煙をする学生への注意や学内での迷惑行為・マナー違反をしていた学生に対して、教育的指導が行われた。</p> <p>③博物館学芸員の資格取得を目指す学生に対して、目白研心高校主催「遺跡フェスタ」への参加を促した。</p> <p>④学生に対して、「染めの小道2014」への参加を促した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①平成25年度は例年以上に多くの卒業生を送り出すことができ少し安堵しているとはいえ、今後はさらに留年生や退学者、除籍者の数が減少するようにしていきたい。</p> <p>②卒業後に社会人として恥ずかしくない人材を育成するため、引き続き学生に対して、礼儀や服装、マナー等について教育的指導を行っていきたい。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①地域社会学科主催「第6回 地域フォーラム：東京の未来を考える」（平成26年1月25日）において、講演者に東京都議を招き、「オリンピック開催と東京の未来」について特別講演を実施した。</p> <p>②落合・中井地域のイベント「染めの小道」（平成26年2月28日～3月2日）に地域社会学科の学生が多数参加し、同イベントのお手伝いをして、大学周辺の地域社会に貢献した。</p> <p>③地域社会学科と戸田市との協力・連携のもと、大学の授業科目の一つとして戸田市寄附講座「地域政策の開発」が秋学期に開講されるとともに、まちづくりに関する共同研究が行われた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○平成25年度は戸田市政策研究所のインターンシップ制度に応募する学生がいなかったため、今後は積極的にこれに応募するよう学生に働きかけていきたい。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①本学科における1年間の各ゼミのさまざまな活動やフィールドワーク等を中心にした報告書として、活動の様子を窺わせる写真付きで『地域社会学科年報 第5号』を刊行した。</p> <p>②「保護者会」を年2回（平成25年7月・平成26年1月）行い、学科の全般的説明や個別相談、講演会を実施した。</p> <p>③フレッシュマンセミナー（平成25年5月29日～30日）では、10名のリーダー学生主導のもとに、横浜市周辺のフィールドワークとそのプレゼンテーション等が実施されて、新入生相互の親睦がより一層深められた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学生定員が1学年80名、専任教員が12名であり、増え続ける学内業務の分担がうまくいかない場合があると同時に、若手教員にどうしても負担がより多くかかってしまう傾向にある。若手教員の負担を軽減して、研究時間を増やすために、何らかの方策が必要になっている。</p> <p>②第2回社会学部合同非常勤講師懇談会が6月に開催されたが、本学科所属の非常勤講師の出席は昨年同様わずかであり、次回以降の参加者数の増加対策も含めて、非常勤講師も含めた教員間の連携強化策を改めて検討する必要がある。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教員志望の学生が、ゼミ担当教員による教育実習先訪問や採用試験に関する熱心なアドバイスと励ましにより、私立学校で教員として正式採用されるに至った。</p> <p>②オープンキャンパスを訪れた受験生に対する本学科の説明用パンフレットとして、「地域密着で学ぶ『社会で生き抜く力』」を作成・配布したところ、受験生及び保護者の方々の間でとても好評であった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○平成25年度の入学人数は83名（前年度と同数）であり、依然として低迷状態が続いている。数年後に訪れる2018年問題を見据え、この低迷状態を打開するためには、喫緊の課題として、学科の抜本的なカリキュラム改定等が必要になってくるものと思われる。</p>

(1) 特筆すべき事項

- ①カリキュラム改定のための予備調査を実施した。この結果、従来通りのコース制は、学科・学部の現状に合わないことが明らかとなった。
- ②採用人事を行い、2名の若手教員を採用することが決まった。

(2) 今後の課題

- 経営学部・経営学科の現代的課題に答えられるように、早急カリキュラム改定を行う必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	経営学科
--------------------------	----------	--------------	------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①本年度より、卒業論文について公開審査方式から提出方式へと変更した。これは、公開審査方式を採用した場合には審査する教員数が一定数必要となるところ、本年度は教員数に対し卒業予定者が多く、審査を1日で行うことが困難となったためである。なお、プレゼンテーションの機会が減る部分については各ゼミナールでフォローすることを申し合わせた。</p> <p>②平成24年度に出勤停止処分を受けた教員が、本年度秋学期より講義に復帰した。昨年度の本報告書に記された「緊急の対応」については、一応の正常化をみたと言える。</p> <p>③マーケティング・コース所属のゼミナールが、毎年恒例となっている他大学とのディベート大会を実施した。</p> <p>④ベーシックセミナーが開始され、全学共通の内容に加え、経営学科独自のプログラムを加えて1年目の講義を終えることができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○中期計画に基づき、新カリキュラムの改定が早急に求められている。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①全体として、各教員の研究計画に基づいた学会報告・論文公表・著作の発刊が行われている。</p> <p>②科研費を申請、取得する教員が少ない。経営系の場合、基本的に文献研究か調査研究となるが、後者は多額のアンケート調査費が必要となる。本学科は現時点では文献研究型の研究者が多いため、科研費を申請する例が少ないとも言えるが、科研費申請に対し、より啓蒙を行う必要がある。</p> <p>③教員の学内業務負担の増加が、一部の教員において研究時間を圧迫する例が散見される。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○教員相互に研究を助け合うことができるような支援体制を整備・拡充する必要がある。昨今、社会科学系ではアンケート調査や、XBRL（財務情報が作成・流通・再利用できるように標準化された、XMLベースの言語による企業データベース）を用いた企業分析の研究が盛んであるが、教員相互に数理統計に関する手法を学べる体制を作ることは、研究の促進のみならず、前項②の科研費取得に向けても好影響を与えるものと期待される。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①前年度は、一部学生が通学途上で歩行喫煙し、事務職員とトラブルを起こす例があったことが報告されているが、本年度は、幸いにして大きな学生指導上の事例は報告されていない。</p> <p>②前年度において実施された、リアルタイムに学生の就職状況を学科として把握する方式がよりリファインされた。各ゼミナール担当教員が把握している内定状況は月次でキャリアセンターに報告され、実数と教授会報告値の乖離はかなり減少したといえる。</p> <p>③ここ数年においては、開学科（平成14年）当時の学生に比して、授業態度、その他の大学での態度共に大幅な向上が見られる。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○初年度生に対する生活習慣、特にアルバイトと学修の両立については、さらなる現状分析、問題点の是正が必要となろう。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①高橋武則教授がデミング賞文献賞（日経品質管理文献賞）を受賞した。</p> <p>②原田昇教授が平成26年4月より日本管理会計学会の会長に就任することが、同学会会員による選挙の結果決定した。</p> <p>③個々の教員が専門性を活かし、社会への貢献に寄与している。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>経営学科における社会貢献とは、学科の性格上、企業との連携、企業への支援を通しての連携となる。前項の①および②ともに、産学連携の組織への貢献であり、かかわる企業もいわゆる大企業であり、その面での貢献はなされているといえるが、今後の課題としては、新宿キャンパス近傍の中小企業（製造業）とのつながりを模索することがあげられる。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①現行カリキュラムの大幅な改定が執行部によって提案されたが、否決され、次年度への継続審議となった。現行カリキュラムのうちうたう緩いコース制、すなわち、特定のコース選択専門科目を一定数単位取得するとそのコースとみなされる方式が、教員と学生のコース不一致も含め、問題点があることは多くの教員が認めるところではある。</p> <p>②新任教員の採用人事に関し、その決定方式について議論があった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①新年度からキャンパス合同教授会が学部会単位の教授会へと大きく変革する。これに対応して、一学部一学科の本学科では、従来の学科会議の位置づけが問題となるであろう。</p> <p>②新カリキュラムを決定することが、次期執行部において最重要課題である。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○経営学科が開学科して12年目を終えたが、学生においても教員においてもさまざまな困難な状況の中で、平成25年度は比較的平穏な年であったと言える。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①繰り返しになるが、カリキュラムの改定が最重要課題である。</p> <p>②新年度は新任の若手教員2名を迎える。若手教員にとって、落ち着いて研究活動・教育活動に集中できる大学・学部・学科を目指すことが人材の定着においても必要となろう。</p>

(1) 特筆すべき事項

【教育】

- ①交換留学制度に基づく学生の海外派遣（韓国語学科）
- ②1学期間のセメスター留学（Power English）の実施（英米語学科）
- ③新たな協定校（台湾の世新大学）との間での交換留学の開始（中国語学科）
- ④ベーシックセミナーの質的向上を目的とした毎週実施のFD活動（韓国語学科）
- ⑤JALPとの連携による日本語教育実習の実施と実習報告書の作成（日本語・日本語教育学科）

【研究】

- ①新たなPh. D. 取得者の出現（英米語学科の廣實義人教授）
- ②中国語学科と中国語教育学会との共催による中国語教育に関する研究発表会の開催（中国語学科）
- ③国際的な学会等での研究発表の実施（英米語・中国語・韓国語の3学科）

【学生指導】

- ①卒業生の就職率100%の達成（中国語学科）
- ②きめ細かい学生指導の実施（例えば、韓国語学科では学生を12名程度の小グループに分け、学業や生活面での個別指導を実施、英米語学科でもベーシックセミナー担当教員、クラス担任、ゼミ担当教員、コア・プログラム担当教員によるきめ細かい指導を実施）
- ③就職活動に関する先輩学生からの話を聞く「先輩を囲んで」の企画・実施（日本語・日本語教育学科）

【社会貢献】

- ①NPO「中国山地の人々と交流する会」理事の鑑屋一教授の中国山地での教育活動への支援（中国語学科）
- ②「松下幸之助国際スカラシップフォーラム」のフォーラム実行委員という立場での胎中千鶴教授の若手研究者育成などの継続的活動
- ③学科への依頼による高大連携活動の一環として、日本における韓国語教育に関する講演の実施（2件）（韓国語学科）
- ④国際交流基金ベトナム（ハノイ）とベトナム教育省のプロジェクトからの依頼による、ベトナムの公立小学校における年少者日本語教育プログラムの策定と教材開発に関する助言、及びホーチミン国家大学人文社会大学等の日本語教員を対象とした日本語教師研修の実施（日本語・日本語教育学科）

【組織マネジメント】

- 「英米語学科教員会議の運営に関する内規」に基づく民主的な学科運営（英米語学科）

【その他】

特になし

(2) 今後の課題

【教育】

- ①学位授与の方針のさらなる明確化と、順次性・体系性を備えたカリキュラムの再構築
- ②学部の中期計画に沿った、学科の特性を反映したシステムの構築（韓国語学科）

【研究】

- ①科学研究費補助金等への申請率の向上を図るための方策の検討
- ②全国レベルの学会誌や国際誌への投稿数（掲載数）を増やすなお一層の努力
- ③学会での諸活動への積極的な参加を促す学内措置の検討
- ④授業数や業務負担の増加による研究時間の削減に対する改善策の検討（特に韓国語学科）

【学生指導】

- ①学科長・ベーシックセミナー担当教員・クラス担任・ゼミ担当教員等の緊密な連携による組織的な指導体制の確立（英米語学科）
- ②就職支援体制の確立

【社会貢献】

教育研究の成果を高大連携事業等を通して社会に還元していく努力の継続

【組織マネジメント】

- ①透明で公正な人事を行うことを通して、教員組織のさらなる質的向上を図っていく必要があること
- ②学生定員充足のための具体的方策の検討（中国語学科）
- ③有期雇用教員の無期雇用への転換を含む雇用条件の改善（特に中国語学科及び韓国語学科）
- ④研究時間確保のための具体的方策の検討（特に韓国語学科）

【その他】

- ①年次計画、特に重点事項の確実な実施
- ②学部教授会を軌道に乗せること
- ③入学定員の安定的な充足を図るための具体的方策を検討する必要があること（特に中国語学科）
- ④教員側の都合を重視した教育ではなく、学生側の立場に立った教育を行っていくようなお一層努力する必要があること

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	英米語学科
--------------------------	----------	--------------	-------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項 ○ビジネス英語関連の授業において、グローバルに活躍する現役社会人をゲストスピーカーとして招聘し、海外事情や外国人とのコミュニケーションについて学ぶ機会を提供した。</p> <p>(2) 今後の課題 ①学生自身にとっての英語の学習目的、獲得すべき知識・能力等の付加価値、達成すべき教育目標などを明確化する必要がある。 ②特にセメスター留学後の英語力維持・向上について、積極的に取り組む必要がある。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項 ①Ph.D.の学位を取得した教員が1名いる。 ②国際学会誌への論文掲載が2件、及び国際学会での研究発表も2件あった。</p> <p>(2) 今後の課題 ①科学研究費補助金への申請率を上げる必要がある。 ②全国レベルの学会誌等への投稿数（掲載数）を増やす必要がある。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項 ○卒業研究の指導強化のため、8月上旬に中間発表会を設定し、主査・副査からのきめ細かい指導を実施した。</p> <p>(2) 今後の課題 ○優秀な学生の獲得には就職率及び就職内容の改善が不可欠であり、ゼミを越えた学科全体の緊密な連携を確立させる必要がある。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項 ①神田外語キャリアアカレッジ顧問、日本青少年文化センター評議委員、日本英語検定協会実用英語技能検定面接委員等を務めた教員がいる。 ②グローバル人材の育成、世界の英語への対応に関する英語教育シンポジウムを主催し、好評を博した。</p> <p>(2) 今後の課題 ①教育研究の成果を、学科主催のセミナーなどを通して、社会に還元していく努力をもっと積極的に行っていく必要がある。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項 ○「英米語学科教員会議の運営に関する内規」を独自に作成し、これに基づいて透明かつ民主的な運営を心がけるようにしている。</p> <p>(2) 今後の課題 ○透明で公正な人事を行うことを通して、学科教員組織のさらなる質の向上を図っていく必要がある。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項 特になし</p> <p>(2) 今後の課題 ○学生の学習意欲向上のため、表彰制度の導入を検討したい。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	中国語学科
--------------------------	----------	--------------	-------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①新たな協定校である台湾の「世新大学」との間で学生の交換留学を開始した。 ②北京大学に加え、台湾の淡江大学での臨地研修が軌道に乗った。 ③学科として力を入れている「中国語検定」で準1級(即戦力としての力があると認められるレベル)合格者2人を出すことができた。 ④1年生からのキャリア教育を重視し、きめ細かな進路指導をした結果、平成25年度卒業生の就職内定率は100%となった。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学力が下位の学生のレベルアップ ②「中国語検定」各級での合格率を高める指導
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学科として「中国語教育学会」との共催で中国語教育に関する研究発表会を行い、中国語学科からも2名が発表を行った。 ②中国語学科を主体とする代表団を送り、台湾の康寧大学で講演等の研究交流を行った。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学会の研究会を含む諸活動への参加を行いやすくするために学内的に改善すべき点があるのではないか。 ②特に若手教員に対し、研究活動と論文執筆への激励と援助を行うこと。
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①卒業生の数は少なかったものの、就職希望者の全員が就職した。就職率100パーセントを達成できた。 ②平成25年3月の卒業生で卒業時に就職が決定していなかった者の中からこの一年のうちに3名が正規の仕事に就いた。 卒業後も学科教員が連絡を密にして励まし続けてきた成果でもありと考えられる。 ③学科の学生の学力が年々向上していることは全教員が実感しているところである。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○退学・休学者を可能な限り少なくすること。
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①NPO「中国山地の人々と交流する会」理事としての鏡屋一教授の中国山地教育活動支援のための継続的活動。 ②「松下幸之助国際スカラシップフォーラム」のフォーラム実行委員としての胎中千鶴教授の若手研究者育成などの継続的活動。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教員が現状以上の「社会貢献」をするためには一定の時間的保証が不可欠と思われる。
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学科の運営は民主的で、すべての教員が学科運営にきわめて協力的である。 ②FD研修にも積極的に参加し、研究助成による成果発表なども行っている。 (FD参加率は出張者を除き、毎回100%である) <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○有期教員の無期への変更。
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○入学定員充足のための特段の努力。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	韓国語学科
--------------------------	----------	--------------	-------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①初年次教育の強化の一環として導入されたベーシックセミナーをより効果的に運営し、授業内容や教育方法を探るために毎週会議を行い、学科の特性を反映するように努めた。その結果を「目白大学高等教育研究」第20号に発表した。</p> <p>②前年度に引き続き、1年生の基礎韓国語の能力を向上させるために教材作成や教育方法などを改善するように努力した。</p> <p>③卒業予定者の進路指導に関する教育（履歴書や自己紹介書作成）を徹底的に行い、就職率アップに全力を尽くした。</p> <p>④学科の特色である海外交換留学システムで、海外に留学している交換留学生やD. D生の指導のために現地訪問を行う一方、キャリア教育のための遠隔指導を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>学部中期計画の内容を踏まえ、AP、CP、DPに学科の特性が反映されたシステムを作る必要があると思われる。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①研究に力を入れ、研究発表の実績が前年度よりアップした。</p> <p>②情報発信と大学の知名度をあげるために海外の学術大会に積極的に参加し、研究活動の幅を広めるように尽力してきた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○年々雑務が増えている傾向があり、研究に専念する余裕がないように感じられるので、改善する余地があると思う。具体的な方策としては、担当コマ数を減らすことや教員の数を増やし、個人の雑務を減らす必要がある。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①前年度に引き続き、1年の担任のみではなく、指導教授システムを採り入れ、学生を12名程度に分け、個別に学業や生活相談などを通じきめ細かい指導を行っていた。</p> <p>②2年次生はほぼ全員留学中であるが、キャリアデザイン等の授業を遠隔で行う。そのほか、担任と協定校担当の教員が頻りに連絡を取り合い、学習や生活指導を順調に行うことができた。</p> <p>③3年次生と4年次生には、就職について積極的な姿勢を持つように、学科全体あるいはゼミを通して徹底した進路指導を行い、就職率アップに全力を尽くした。平成25年度の本学科卒業生の就職率は前年度の83.9%から96.9%へと急上昇した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>現在のシステムとしては、学生と接することは授業のみに限定されている傾向がある。オフィスアワーが設けられているが、学生の授業などで一部の学生は相談に来られるが、多くの学生は、特別な理由がない限り相談に来ない。したがって、学科の学生全員を対象に多くの学生に身近に、気軽に接しながら、きめ細かい指導ができるようなシステムを作る必要がある。しかし、教員の負担が重くなるので、慎重に方策を考える必要がある。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○日本における韓国語教育の高大連携について、学科に依頼があり、2人の教員がそれぞれ講演を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○教育のみではなく、韓国語学科として社会に対する情報発信を積極的に行うべきと認識している。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○例年と同じく、学生指導や教育においては教員が率先して動いている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学科長として、学科のために学科教員に雑務や学生指導を強いるしかないこともあり、研究に取り組む時間に対する配慮ができない側面がある。雑務や学科行事が多い、教員からの不満もある。</p> <p>②組織マネジメントの一環として、学科長は良好な執務環境を作る責任も担っているので、教育と研究のバランスを取るための環境作りに努めなければならないと思う。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>特になし。</p>

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	日本語・日本語教育学科
--------------------------	----------	--------------	-------------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①「JALPと連携した日本語教育実習」を実施し、ゼミ生、教員、留学生が体系的に学ぶ機会を得ることができた。記録として実習報告書を作成した。理論面と実践面を結びつける機会となり充実した学びとなった。</p> <p>②台湾研修（中国語学科と合同）の中に①日本語教育実習②日本語教育史跡視察を体系的に取り組み、研修プログラムを充実させた。</p> <p>③国語科教員免許状取得希望者に自主勉強会サポートを行ったので、今後が期待される。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①「日本語教授法」では、交換留学生やD. D生が在籍することもあり56名という人数なので、2クラスに分け少人数できめ細かく指導できたら、と思われる。</p> <p>②交換留学生の支援カリキュラム、試験等の整備と構築が課題。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学科教員が著書1件を刊行した。</p> <p>②学科教員の研究論文掲載は10件であった。</p> <p>③学科教員の研究発表は7件であった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①研究発表した内容は引き続き論文として発信していきたい。</p> <p>②研究論文をさらに著書として刊行し、発信していきたい。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○学生の社会人基礎力や就職活動に必要とされる情報を提供した。「先輩を囲んで」を企画し、先輩の就活プロセスについて傾聴する機会を作った。これにより学生の就職活動への意識が強化された。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○学生の「出口対策」に力点を置き、さらに就職活動への意識を高める工夫をしたい。特に日本語教員、国語教員の増加を図るよう努力したい。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①国際交流基金ベトナム（ハノイ）とベトナム教育省のプロジェクトから依頼を受け、ベトナムの公立小学校における年少者日本語教育プログラムの策定、教材開発の助言を行った（平成26年3月）。</p> <p>②ホーチミン国家大学人文社会大学等の日本語教員を対象に日本語教師研修を実施した（平成26年3月）。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○目白大学日本語・日本語教育学科の活躍を知らしめるような宣伝の方途も模索したい。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○「北京外国語大学・北京日本学研究中心」との交流協定の協議・協議文書の検討をし、北京日本学研究中心（修士課程）との交流プログラム企画を検討。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○さらに研修プログラム、増加する海外の日本語教育専攻者との交流の機会をはかりたい。</p> <p>○非常勤講師との情報共有化が必要であろう。特に教職履修者が直接かかわる教育実習のための事前指導が稀薄なようで、不安を抱える学生たちの強い要望で、現在、学科教員がボランティアで補充指導を行っているなど、問題も生じている。</p> <p>○入学希望者の増加を期して、学科ではその方途を模索中である。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p style="padding-left: 20px;">特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p style="padding-left: 20px;">特になし</p>

(1) 特筆すべき事項

3学科の運営を尊重しながら、毎月定期的な学科長会議、実習教育委員会、国家試験・就職対策会議等を行って、学部としての共通理解を図り、協同活動を促進した。平成25年度の活動は以下の通り。

①学部教育について

- 平成25年度退学者は18名、休学者7名、復学者10名であった。退学者のうち11名が進路変更を理由であり、各学科で早期発見と対応に取り組むとともに学科間での情報交換に努めた。
- 実習施設について関東地域など近隣施設の比重を高めた。中でも理学療法学科では関東圏比率が基礎実習100%、評価実習91%、総合実習83%と着実に成果を上げている。また各学科とも客観的臨床能力試験(OSCE)を導入して事前教育の向上を図るとともに、実習中は担当教員による実習支援体制を強化して、実習不適合者への減少に努めている。
- 平成23年度から3学科共同で実施している3年次履修科目「チーム医療演習」について、グループでの症例検討及び報告を問題基盤型学習(PBL)方式で行う体制を整備した。

②入学試験における定員確保

- 各学科の入学人数はPT学科103名(定員80名)、OT学科67名(定員60名)、ST学科52名(定員40名)となり、学部として確保目標数を達成した。平成23年度作成のリハビリテーション職種の紹介DVDを高校訪問等で活用した。各学科ともオープンキャンパスで特別体験プログラムを実施して受験生確保に努め、入学者は前年度より増加した。

③国家試験及び就職に関わる対策

- 国試対策委員会を年間5回実施して情報交換を密にしてきた。各学科内での指導体制を強化して熱心に取り組んだ結果、各国家試験の合格率はPT学科97.2%(新卒全国平均90.2%)、OT学科97.8%(同94.2%)、ST学科93.1%(同88.4%)と3学科とも全国平均を大きく上回るだけでなく、全国4年制大学の新卒合格率を超える成果を得た。また、国試合格者では就職率100%を維持している。□

④研究について

- 学部教員の研究意欲は高く、学会発表、学会誌等への投稿数も総じて高いので、それに応じて特別研究費、科研等申請率も高める必要がある。ただし実習支援、国試支援等により教員の勤務時間は長く、研究時間確保が岩槻キャンパス共通の課題である。□

⑤社会貢献について

- 目白大学耳科学クリニックにおける診療は引き続き発展し、地域医療に大きく貢献している。大学附属クリニックとして特色ある診療活動を重視する方向への質的転換を図っている。
- 地域連携協力事業の一環として、平成25年度も作業療法学科主導で目白発達キャンプを夏期休暇中に実施した。
- 一般社団法人リハビリテーション教育評価機構の審査を3学科が受審し、適切な養成施設として認定された。
- 目白大学と日本リハビリテーション連携科学学会との共催で、新宿キャンパス研心館で第15回学会を開催した。

(2) 今後の課題

- 基礎教育科目については、大学全体での基礎教育の考え方との整合性を検討。専門科目では3学科共同のチーム医療演習が定着した。今後は看護学部との連携・協力の検討が必要。
- 国家試験対策は成果を上げ、3学科とも高い合格率を示した。今後は教育推進室を活用した組織的な支援体制を整備すること。受験生の確保に関しては、2018年問題を含め、今年度中に学部としての対策を立案すること。
- 研究面では、研究活動を科研費等の外部競争的資金の獲得と、研究環境の改善、研究時間を確保すること。
- 社会貢献に関しては、目白大学耳科学研究所クリニックの地域貢献、目白大学発達研究会の活動の継続と拡大。
- 専門科目における医師卒の拡大。
- 臨床実習におけるドロップアウト学生を出さないための事前の対策と、事後のフォローアップ。
- ハラスメント防止策。
- さいたま商工会議所政策企画推進課との連携強化を図り、医療福祉機器の共同開発推進。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	理学療法学科
--------------------------	----------	--------------	--------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①前年度に引き続き、再試験回数や欠席が多い学生情報を学科内で共有し、学科教員全体で改善指導に取り組んだ。</p> <p>②卒業生の就職施設への実習依頼等の積極的な実習地獲得活動により、良質な関東地方を中心とした実習地を新たに獲得できた。</p> <p>③基礎ゼミにおいて、レポートの書き方を徹底的に指導した結果、学生のレポート作成能力の改善が認められた。</p> <p>④知識・技術定着のために講義や実技科目において頻回な小テストを実施し、学習習慣の定着を図った。</p> <p>⑤一部の授業でPBL方式を導入し、学生の学習態度面に関する成果を得た。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①引き続き、知識・技術定着のための方法論を検討する。</p> <p>②臨床実習におけるドロップアウト学生と実習施設への対策とケアを今後ともさらに充実させる。</p> <p>③国家試験対策となる授業内容を検討する。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①大学体育教員の職場環境変化について、「大学体育学」に投稿した。</p> <p>②保健医療学部入学生に対して実施した授業態度、身だしなみ等に関するアンケート調査結果を「目白大学健康科学研究」に投稿した。</p> <p>③高齢者における1分間のバランスパッド上での立位保持能力と歩行様式および転倒との関係について、「理学療法科学」に投稿した。</p> <p>④地域在住高齢者に対する運動介入が1年後の運動行動に与える影響について、「日本老年医学会雑誌」に投稿した。</p> <p>⑤問題解決療法を用いた生活習慣改善の介入効果について、「目白大学健康科学研究」に投稿した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①科研費などの外部競争的資金の獲得。</p> <p>②個々の教員だけでなく、チームとしての研究活動の推進。</p> <p>③研究時間の確保。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学生の臨床実習前不安感を解消するために、実技指導を多く実施した。</p> <p>②就職活動や国家試験対策について個別面談を多く採り入れた。</p> <p>③授業やゼミ時以外にも医療人としてのマナー、接遇について説明した。</p> <p>④学習に問題がある学生に対して、個別面談を実施した。</p> <p>⑤授業時以外にパソコンの基本操作など専門領域ではない部分に関しても指導を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①実習前指導のさらなる充実。</p> <p>②学生の学習指導に関する保護者との連携。</p> <p>③引き続き、高い国家試験合格率を維持するための施策。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①（公社）埼玉県理学療法士会学術局長としての活動。</p> <p>②浦和チアリーディングクラブ、さいたまチアリーディングチームの実技指導と運営支援。</p> <p>③埼玉県サッカー協会指導者育成事業に対する目白大学サッカー部員の派遣。</p> <p>④日本リハビリテーション連携科学学会第15回大会の企画・運営。</p> <p>⑤荒川区介護予防事業における運動指導。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①各自治体との連携した事業を模索する。</p> <p>②臨床実習実施施設との共同事業の検討。</p> <p>③理学療法士会・理学療法士協会の活動への積極的参加。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学科内に引き続き理学療法学科倫理審査委員会を組織し、学生の卒業論文執筆時に審査を実施し学生指導を行っている。</p> <p>②学科内に実習指導委員会を設置し、基礎実習～総合実習までの臨床実習を総合的にコーディネートしている。</p> <p>③初年度教育を重視し、1年次にはA・Bクラスともに副担任制度を導入している。</p> <p>④2年次から4年次までグループ学習制度を導入し、国家試験対策に効果を挙げている。</p> <p>⑤臨床実習時には、担任・ゼミ担当・実習地担当が多面的に学生をサポートする体制を整えている。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①国家試験対策組織のさらなる構築。</p> <p>②学習障害もしくはその予備軍となる学生へのサポート体制の確立。</p> <p>③学科内研究グループの構築。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①前年度に引き続き、3年次生保護者会を開催し、臨床実習・卒業研究・就職・国家試験合格までのスケジュールを詳細に説明した。</p> <p>②前年度に引き続き、実習指導者会議を開催し、大学と臨床実習施設との間で情報を共有し、連携して学生指導にあたった。</p> <p>③「実習に臨む学生の心構えと準備について」に関するセミナーの講師に本学科卒業生を招聘してセミナーを開催した。</p> <p>④本学科独自の同窓会組織である目白理学療法士会と共同して研修会を実施した。</p> <p>⑤（公社）埼玉県理学療法士会に多くの教員が役員として活躍した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①良質で近距離の実習地のさらなる獲得。</p> <p>②チーム医療演習などの他学科とのさらなる授業科目における連携。</p> <p>③研究面においても他学科との共同研究等を進めていく。</p>

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①能動的学習の機会が増えつつある（基礎ゼミ、精神障害評価・治療学、チーム医療演習、etc）。 ②臨床実習についてはクリニカルクラークシップ普及のため啓発映像を新たに作成し、実習指導者会議で使用した。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①アウトカムを重視した教育法を全教員が意識して行う。 ②上下の学生交流が進むような仕掛けを作る努力を行う。
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①科研費等の外部資金獲得が進んでいる。 ②他大学と連携した研究を進めた。 ③目白大学発達研究会を中心にした地域貢献事業が進んでいる。 ④めじ研を主体にした研究の結果を発表できた。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①継続的な外部資金の活用を図る。 ②研究フィールドを確保する。 ③他学科との共同研究を推進する。
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①東日本大震災により亡くなった学生の同級生と家族に支援を行った。 ②臨床実習でつまづいた学生への個別支援を行った。 ③学力に問題のある学生については、保護者との面談など丁寧に対応した。 ④国家試験対策には教員全員が全力で取り組み、過去最高の合格率を達成した。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学生の家族からハラスメントの訴えがあった。こういうことが今後発生しないように注意喚起する必要がある。
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①目白大学発達研究会が、研修会やキャンプを行った。 ②岩槻区の社会福祉協議会や就労継続支援施設との連携を進めることができた。 ③専任教員の専門性を生かした各種研究会・勉強会を行った。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ①目白大学発達研究会の活動を継続する。 ②岩槻区と連携した活動を進展させる。
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学科内組織として、国家試験PJ、受験生アップPJ、地域連携PJが機能した。その結果、3年前と比較して志願者数の増加と国家試験合格率を上げることができた。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学科内組織として、国家試験PJ、受験生アップPJ、地域連携PJを25年度までの計画で実施してきた。平成26年度以降、新たな目標を設定していきたい。
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学生募集の一環として、高校生向けの特別企画を実施した。 ②学生募集の一環として、作業療法学科公式ブログを開設し、継続的な記事の配信を行った。 <p>(2) 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○今後とも実質的に受験者増を目標にあらゆる対策を行う。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	言語聴覚学科
項目	自己評価			
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①前年度同様、学科教員がチームとして情報を共有しながら対応した。</p> <p>②OSCEは1年次には接遇、2年次春には専門領域での検査まで、2年次秋には評価全般、3年次春には言語聴覚療法全般と、学生の学習に応じた段階的評価が可能となり、それに伴う個別指導の充実を図った。</p> <p>③学科専任教員が担当する科目については学期ごとの全員での評価会議を定着させ、教員間、領域間での評価の差異の軽減を図った。</p> <p>④基礎ゼミや言語聴覚障害学演習など1年次の学習については自発的に学習することをまず促す指導を徹底した。</p> <p>⑤チーム医療演習において理学療法学科、作業療法学科と共同で実施した。</p> <p>⑥国家試験対策では能力別グループ指導、個別指導などにより、安定した合格率を達成することができた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①入学者の学力差はさらに拡大し、専門教育の導入に必要な基礎学力の向上を入学前研修、初年次教育で効果的にするよう努める。</p> <p>②国家試験対策については早期からの取り組みを継続し、今後も継続して安定した合格率の達成に努力する。</p> <p>③臨床実習に向け2年次から段階的な内容で臨床実習特論が開講されることとなった。</p> <p>④保健医療学部合同のチーム医療演習については内容の検討、コマの配分など、継続して検討する。</p>			
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学部共通のテーマである接遇教育について、次の段階として臨床実習直前を想定した教育内容について検討を継続した。</p> <p>②学生の会話能力の向上をテーマとした特別研究を継続し、会話能力向上の指導のためにDVDを作成した。</p> <p>③特別研究費や科研費など競争的研究資金の導入に努めた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①臨床実習前の接遇については新たなDVDの作成などを検討する。</p> <p>②会話能力の向上など養成教育に関わる学科教員全員で取り組むことのできる研究テーマを検討する。</p> <p>③教育に割かれる時間が長い教員が、個別の研究に向かう意欲を損なわないよう、競争的研究資金の獲得を奨励する。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学生への個別指導を担当を中心に継続し、その情報を学科教員間では共有し、学生指導に活かした。</p> <p>②臨床実習では実習地の担当者と教員が緊密に連絡をとり、必要に応じて学生の状況を早期から把握してサポートを行った。</p> <p>③国家試験については詳細な分析を行い、その結果を個別指導に活用した。</p> <p>④学生の個別の問題については本人への指導とともに、保護者を含めた三者面談を随時実施し、保護者にも理解と支援を求めることに努めた。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学生の抱える問題は多様化しており、可能な限り早期に対応する方法については今後も検討課題である。</p> <p>②臨床実習前には知識や技術の習得だけでなく、対象者とのコミュニケーションなどの対応についても学習できる体制づくりに努める。</p> <p>③国家試験において安定して高い合格率を維持するよう努める。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①目白大学耳科学研究所クリニックを通し、耳鼻咽喉科診療、言語聴覚療法など地域への医療提供を継続した。</p> <p>②特養や介護老人保健施設など、地域の近隣諸施設との連携を図った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①特養や介護老人保健施設との連携については行事に限られており、定期的、かつ日常的な連携について継続する。</p> <p>②言語聴覚療法については対象者の分布が小児に偏る傾向があり、特に高齢者の対象者獲得の方法を検討する。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①学科全員で取り組む学生指導、国家試験対策などについて教員間の連携体制が構築されてきている。</p> <p>②学科内のFDでもある複数の教員が互いの授業を見学し、自らの授業にも反映させる授業を本年も実施した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学生の出身地により、毎年、新たな臨床実習施設の開拓が必要となっており、経験の浅い実習指導者の養成も行う。</p> <p>②言語聴覚士という職種の広報と学科の特色のアピールなどを通して入学志願者の増加を図る。</p> <p>③2年間欠員であった助教枠がようやく埋まり、さまざまな業務に迅速に対応できるように、助教の教育を実施する。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>特になし</p>			

(1) 特筆すべき事項

《教育》

- ①保健師教育選択学生の学内募集方法を再検討し、初めて25年度に実施した。
- ②学生の異文化理解促進のために、目白大学看護学部と中山医学大学護理学系（台湾）間の学生交流に関する協定を締結した。

《研究》

- ①外部資金獲得、研究の促進に努め、なかでも海外に広く目を向けた論文発表が推進されるように促し、成果を得た。
- ②教員は学内授業のほか外部施設での実習指導、実習に関する事務的処理等で多忙を極めており、研究日取得が困難であった。

《学生指導》

- ①看護師国家試験合格率98.2%の高率を維持することができたが、保健師合格率は86.0%とやや低迷した。
- ②就職支援として実習施設の就職説明会を学内で開催し、60/107名が実習施設に就職した。また、就職率においては100%であった。

《組織マネジメント》

- ①昨年度に引き続き、学部のAP、DP、CPを検討し、策定した。
- ②第三次中期計画策定委員会を中心に、学部の中期計画・中期目標を策定した。
- ③実習に関連した多量の事務処理内容を教員が実施しているため、事務職員の雇用を要望した。
- ④実習施設との緊密化を図るため、就職説明会と年度末評価会議の同日開催、施設への講師派遣等に努めた。

(2) 今後の課題

- ①進捗状況の評価を行いながら、学部の中期計画、中期目標の達成を目指す。
- ②今日の看護職の役割拡大と大幅な医療体制の転換に伴う看護教育内容の変化に見合ったカリキュラムを策定する。
- ③本学部と中山医学大学護理学系との交流を実践し、その経験から今後の課題を抽出する。
- ④担任、ゼミ指導教員によって個々の学生の状況把握に努めることでドロップアウトを防ぎ、国家試験合格率を維持向上させる。
- ⑤教員の研究環境を整えるため、雑務の整理に努める。
- ⑥継続して海外への論文投稿、学会発表を促進する。
- ⑦FD活動を通して、外部資金獲得のための支援に努める。
- ⑧地域に開かれた大学としての学部の役割を検討し、実践をはかる。
- ⑨看護学部開設10周年にあたるため、記念事業を実施する。
- ⑩同窓会看護学部支部「槻の会」の支援をしつつ、実習施設との連携、学生確保などへの協力を得られるようにはかっていく。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価单位名称）	看護学科
--------------------------	----------	--------------	------

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正による新カリキュラムの3年目の検証と調整を行った</p> <p>②埼玉県通達による保健師教育実習受け入れ(入学定員の25%)を受け、保健師教育選択学生の学内募集を行い25名を決定した。</p> <p>③学生定員増による実習地確保と病院実習のための病棟配置の学生人数の調整を継続実施した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正による旧カリキュラム終了に伴うカリキュラムの運営見直しと学生定員増による教育体制の見直し改善の継続検討の強化。</p> <p>②旧カリキュラム終了に伴い過年度生の単位取得に障害をきたすことのないように注意を払う。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教員各自の研究促進と研究費の積極的獲得に努力した結果、科研費新規1件、継続3件の成果を得た。</p> <p>②海外の学会参加を勧め、学会発表1件を実施することができた。</p> <p>③主たる実習施設や埼玉県看護協会等に「研究の促進と看護の質の向上」を目的として、積極的に教員を派遣した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①教員各自の研究促進と外部資金獲得の継続及び海外への研究発表を促進する。</p> <p>②主たる実習施設や看護協会へ継続して教員を派遣すること、及び共同研究を推進し、看護の質の向上に努める。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○看護師国家試験合格率98.2%、保健師国家試験合格率86.0%、及び就職率100%の成果があった。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①看護師・保健師国家試験不合格者のフォロー及び国家試験合格率の向上を図る。</p> <p>②多様な背景を持つ学生のための学習及び生活上の個別指導体制の強化を継続する。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○地域に開かれた大学としての学部の役割検討と実践。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①教員会議、学科内会議、各委員会等の定期的会議の開催と有機的運営に努力した。</p> <p>②夏季集中会議開催により、当該年度の教育課程進捗状況と課題の確認、その他教育運営の中間的見直しと検討を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①学部内組織の編成と役割分担の見直しと確立を図る。</p> <p>②学部、研究科および認定看護師養成の有機的・効果的教育活動のための教員組織を見直す。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①目白大学看護学部と中山醫學大學護理学學系間の学生交流に関する協定に基づき、平成26年度の留学生受け入れのための準備を開始した。</p> <p>②高校へ出張授業を積極的に行い、受験生確保に貢献できた。</p> <p>③卒業生の帰属意識の向上と卒業生相互が切磋琢磨できるよう、同窓会支部「槻の会」の自立を支援した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①中山醫學大學護理学學系からの留学生を受け入れ、本学部生との異文化間交流の成果があがるように努める。</p> <p>②看護学部開学10周年記念準備委員会を発足させる。</p> <p>③卒業生の進路及び在職率を調査する。</p> <p>④同窓会支部「槻の会」への支援を継続的に行う。</p>

別 科

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価		別科用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	留学生別科日本語専修課程(JALP)
項目				
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①平成25年度のJALP学習者は春学期71名、秋学期83名、合計154名の日本語教育を実施した。内訳はA. 総合日本語コース（主に大学進学者対象）が142名、B. 大学院進学コース（大学院進学者対象）が12名である。</p> <p>②ベトナム等非漢字圏の学習者の増加に対応すべく、平成25年度秋学期よりN5（初級前半）レベルを新設し実施した（履修者計7名）。</p> <p>③卒業生の進路は大学院15名、大学8名、各種学校14名、その他18名となっている。</p> <p>④短期日本語・日本文化研修（約2週間）を2回実施した。海外協定校の学生が対象で、夏期16名、冬期23名の参加者に日本語学習と学外活動中心に日本文化を体験する研修を行い、アンケートでは満足度の高い評価を得た。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○日本語能力が高くない交換留学生が増加しているが、教室や教員の確保ができないため、学部授業を履修させている。交換留学生のニーズに対応した学習支援が課題である。</p>			
研究	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>○国内外でポスター発表3本（日本語プロフィール研究会・アカデミックジャパニーズ研究会）、及び論文・実践報告2本（「目白大学人と教育」と「筑波大学留学生センター日本語教育」）を執筆した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①新年度も各学会への論文発表、実践報告を投稿する。</p> <p>②JALP日本語教育研究会を立ち上げ、内部の研究活動を活発に行うこと。</p>			
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①大学、大学院進学を希望する学生対象に年間を通じて進路ガイダンス、個別カウンセリング、学内外の教員・卒業生を招いた進学説明会を開催した。</p> <p>②目白大学の学部生との交流活動、日本語学習支援を目的にチューターを募集し実施した。参加者は春・秋学期合わせて日本人学生（55名）、JALP生（60名）である。</p> <p>③学習の遅れがちなベトナム留学生に対する日本語学習のフォローアップ（補講）を行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○初年次教育の徹底と生活・学習面における躰教育を徹底し、日本留学の夢を実現させること。</p>			
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①地域国際交流機関や団体が主催する日本語ボランティア養成講座の講師を務め、在住外国人に対する日本語学習支援活動を行った。</p> <p>②ミャンマーの日本語教育や環境を整備する役割を担うMAJAの日本語教育者（8名）に対し、日本語教育のコースデザインや教授法、教材教具に関する講義を実施した。</p> <p>③居住地の英会話教室のコーディネーターや外国人観光客へのサポートを行った。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>○目白大学周辺の地域の人たちとの交流活動を促進すること。</p>			
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>①目白大学におけるJALPの役割と目標を学内周知してもらうため、教授会でのJALP報告や日本語教育センター会議、運営委員会等での報告を行った。</p> <p>②国際交流サービスグループと連携し、学生募集活動や交換留学生支援、短期日本語・日本文化研修、チュートリアセッション、課外文化活動等の業務を実施した。</p> <p>③日本語・日本語教育学科の学生の日本語教育経験の場としてJALPを提供し学生を指導した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>①外国語学部とJALPとの連携を強化すること。</p> <p>②海外提携校との連携を推進し、交換留学生の日本語学習支援をシステム化すること。</p> <p>③非常勤日本語講師の管理及び連携を推進すること。</p>			
その他	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>特になし</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>特になし</p>			

付 属 施 設 等

自己評価

(1) 特筆すべき事項

①講座（新宿キャンパス）

- マイナーな言語としてフィンランド語・スウェーデン語・デンマーク語・タイ語・台湾語・ポルトガル語を開講。
- 新宿キャンパスでは託児室を完備。

②講座（岩槻キャンパス）

- 目白大学公開講座：さいたま市との共催で行う医療系公開講座で毎回定員を大幅に超える申し込みがある（抽選）。平成25年度担当教員は看護学部教員で『健康寿命を延ばす秘訣5か条』と題して実施。定員50名。社会貢献事業の一環として、地域の方を対象に講座受講料無料で行っている。

③物的資源活用

- 教育研究に支障をきたさない範囲で、有料で大学施設を学外諸団体、及び企業に貸し出している。

【所感】

講座部門において、ここ数年連続して受講生の数が減少している。それに伴い講座での収入も減少している。本学のエクステンション講座の受講生は、ほとんどの方が近隣の方で成り立っていたが、年齢層を見ると高齢の方が講座を継続しない傾向にあり、今後も受講生は減るとみている。新規で入会してくる率の高かった40歳くらいの方の入会も減っており、昨今の景気によるものと考えられる。ひとつの例としては、数年前まで一番受講生の多かった韓国語は韓流ブームの衰退か政治的な影響かは判断が難しいが、今年は半減した。施設貸し部門においては、本学は根強い人気があり順調であった。

(2) 今後の課題

どの大学もエクステンション講座は、赤字傾向と聞くが社会貢献事業として意義がある。現在、教室数が不足傾向と聞いている。今後の中高も含め、全学生数の動向を見極めながら、エクステンションセンターについても考えていくべきだと思う。

自己評価

(1) 特筆すべき事項

①センター（新宿）及び分室の相談体制・相談業務の拡充

1) 平成25年度の成果（実績報告）

- センター（新宿）では、平成24年度6月より子ども料金対象を高校生までに引き上げる料金改正を行った。平成25年度はその成果として、就学前から思春期・青年期にわたるまでの「しつけ・育児」に関する保護者からの申込件数が増加した（平成24年度23件⇒平成25年度36件：前年度比157%）。その多くは親子並行面接となり、センター全体の延べ面接回数増加にもつながった（平成24年度2650回⇒平成25年度3270回：前年度比123%）。申込件数も増加傾向にある（平成24年度136件⇒平成25年度150件：前年度比110%）。
- 分室では非常勤相談員の勤務体制の効率化など相談体制の整備を進めた。結果、分室の延べ面接回数は前年度の水準を維持することができた（平成24年度762回⇒平成25年度737回：前年度比97%）。申込件数は77件と増加している（平成24年度58件：前年度比133%）。
- 埼玉病院事業として「新規採用看護師等教育事業」「医師、看護師、職員等のメンタルヘルスケア事業」及び「研修事業」の3つを引き続き実施しており、平成25年度は80名の看護師等病院職員が対象となった。内容としては心理カウンセリング面接体験や新人教育担当者研修会などであった。
- 学内連携として目白大学耳科学研究所クリニックとの連携強化を進め、合同カンファレンスを平成25年11月30日と平成26年3月28日に開催した。加えて、センター職員がクリニックへ伺い、クリニックでの相談体制拡充について検討を行った。

2) 平成25年度の成果に対する評価

- センター（新宿）、分室ともに来談件数は前年度以上の高い水準を維持した。
- 開始より4年を経たEAP事業はもとより、一般外来の増加が著しかった。このことによって増収を保つことができた。

②臨床心理学的知識及び援助技術の提供による地域貢献

1) 平成25年度の成果（実績報告）

- a. セミナー形式公開講座(新宿)平成25年8月3日に4講座の開催 参加者40名
- b. 公開講座(分室)平成25年11月9日「子どもの心の声を聴く～カウンセリングに学ぶ話の聴き方～」
講師：沢崎 達夫 先生（本学心理カウンセリング学科教授） 参加者41名
- c. 公開講座(新宿)平成25年11月16日「サイコドラマ」
講師：増野 肇 先生（ルーテル大学名誉教授） 参加者17名
- d. 公開講座(新宿)平成26年2月22日「心理療法の動作と声～狂言に学ぶ～」
講師：奥津 健太郎 先生（能楽和泉流狂言方） 参加者9名

2) 平成25年度の成果に対する評価

前年度に引き続き、セミナー形式講座、公開講座ともに好評を博した。

(2) 今後の課題

①センター（新宿）の相談体制の整備

開設以来のべ面接回数は増加傾向にあり、特にここ2～3年は顕著であった。現状では地域の要望に対して十分とは言い難く、時間的かつ人力的な体制の強化を図りたい。

②分室の相談体制の整備

独立行政法人国立病院機構埼玉病院のメンタルヘルス事業の定着もあり、分室に対する地域の要望が多くなってきている。平成25年度は非常勤相談員の配置効率化を図ったが、地域の要望に対して十分とは言い難く、時間的かつ人力的な体制の強化を図りたい。

③地域貢献活動の拡充

- 1) 平成25年度より本格化した目白大学耳科学研究所クリニックとの連携について、さらなる充実を目指したい。
- 2) 1) については、地域貢献のみならず、学内連携による近接領域との合同研究としての計画も進めていきたい。
- 3) セミナー形式講座はセンター所員持ち回りで多様な講座を用意してさらなる充実を目指す。
- 4) 新宿及び分室で行う公開講座は、これまでの参加者からのフィードバックを参考に適切なものを企画する。

④修了生等の臨床心理士に対するフォローアップ研修制度の確立

かねてより、修了生のフォローを中心とした、研修体制の枠組みについて現在検討中である。これまでの修了生で臨床心理士の資格を持っているOG/OBの組織化をすることが必要であり、課題である。心理学研究科など関係部署との十分な検討の上、制度を開始する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究所用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	教育研究所
--------------------------	-----------	------------------	-------

	開催時期		テーマ・内容等	受講者数
公開講座等開催	12月	21日	公開講座「大学におけるにおける初年次初年次教育の進め方」	211名
	8月	7日	学習支援システムMELS研修会	8名
	7月	14日	プロジェクト研究グループ1「大学教員の基本的な授業技術」第1回研究の進め方	7名
	7月	31日	プロジェクト研究グループ1「大学教員の基本的な授業技術」第2回アクティブラーニングについて	7名
	9月	4日	プロジェクト研究グループ1「大学教員の基本的な授業技術」第3回アクティブラーニングの定義	7名
	10月	2日	プロジェクト研究グループ1「大学教員の基本的な授業技術」第4回アンケート調査項目について	7名
	10月	16日	プロジェクト研究グループ1「大学教員の基本的な授業技術」第5回アンケートの実施	7名
	6月	26日	プロジェクト研究グループ2「ICTを活用した授業方法の開発」第1回研究内容と進め方について	7名
	7月	17日	プロジェクト研究グループ2「ICTを活用した授業方法の開発」第2回e-learningコンテンツについて	6名
	8月	7日	プロジェクト研究グループ2「ICTを活用した授業方法の開発」第3回MELS研修会と併催	8名
	10月	30日	プロジェクト研究グループ2「ICTを活用した授業方法の開発」第4回コンテンツの充実	5名
	11月	27日	プロジェクト研究グループ2「ICTを活用した授業方法の開発」第5回ドリルシステム、今後の研究の進め方	6名
機関紙等	刊行時期		テーマ・内容等	
	3月	31日	所報「人と教育」第8号 学内論説テーマ「コミュニケーション能力」	
	3月	31日	高等教育研究 第20号	

自己評価

- (1) 特筆すべき事項
- ① 次の2つのテーマについて調査研究を行った。
 - ・ 「大学教員の基本的な授業技術」
 - ・ 「ICTを活用した新しい授業方法の開発」
 - ② 所員会議について
 - ・ 所員会議を10回実施した。
 - ・ 研修会1回、公開講座1回を開催した。
 - ・ 紀要の発行に関する査読、所報の閲読を実施した。
 - ・ 教育研究所の業務内容が多岐にわたり、所員負担が増大傾向にある。
 - ・ 会議資料や議事録については、PDFファイルなどに電子化しWeb上で共有した。
 - ③ ICT活用に関すること
 - ・ 本年度からe-learningに関する維持管理、運営の業務が教務より移管した。
 - ・ 文部科学省の補正予算によるパソコンのタブレットPCの維持管理を行った。
 - ・ タブレットPC（富士通27台）、iPad（Apple社43台）等の機器の貸し出し、需要が増加した。
 - ④ その他
 - ・ 「高等教育研究」の査読、「人と教育」の原稿の閲読に関する規定を定めて5年目。査読技術のさらなる向上が図れたが所員の負担増。
 - ・ 「高等教育研究」の原稿締め切り厳守を敢行したことにより、辞退が11件あった。
 - ・ 「人と教育」の学内教員の出版物特集が好評。次年度以降継続することを確認した。
- (2) 今後の課題
- ・ 新規事業の取り組みや充実を進めているが、助手の負担が増大している。
→ 兼任研究員だけでなく、専任教員（研究員）を配置し、研究機関としての適切な取り組みの検討と組織改革が必要。
 - ・ e-learningのコンテンツの充実と普及に関する取り組みが必要。
 - ・ 高等教育研究を中心とした教育研究所としての位置づけの具体化（検討の継続）。
 - ・ 学外へのプロジェクト研究の成果の公表や発表をホームページ等を活用し積極的に行う。
 - ・ プロジェクト研究や新たな教育課題について学外の研究者と協働した研究推進等も必要。
 - ・ 産学協同、地域と協働した研究推進についての検討と具体化。
 - ・ 所員の学内での分掌としての位置づけが明確でなく、仕事内容の評価と認知度を高める必要がある。→ 教授会等での所員の公表

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究所用評価シート	組織名称 (評価单位名称)	経営研究所
--------------------------	-----------	------------------	-------

	開催時期	テーマ・内容等	受講者数
公開講座等開催	6月 5日	原価企画の研究～キャノンの経験に基づいて～	30名
	11月 21日	日本経済と金融商品	150名
	月 21日	経営面から見た日本のモノづくり	100名
	月 27日	ブリヂストンとサプライ・チェーン・マネジメント	30名
	12月 18日	日立建機の経営とVE	30名
	月 日		名
	月 日		名
	月 日		名
	刊行時期	テーマ・内容等	
機関紙等	11月 16日	目白大学経営研究所ライブラリー第5巻『会計学の諸問題』	
	月 日		
	月 日		

自己評価

(1) 特筆すべき事項

- ① 経営学部・経営学研究科との共催で目白大学創立20周年記念プロジェクトの一環として記念シンポジウム「アベノミクスと経営」を統一テーマとして企画し、盛大で成功裏に実行できたこと
講演者とテーマ
(a) 中原伸之氏 (元東亜燃料株式会社取締役社長・元日銀政策委員) 「日本経済と金融政策」
(b) 増田譲二氏 (元日産自動車株式会社VP) 「経営面から見た日本のモノづくり」
- ② 経営研究所ライブラリー第5巻『会計学の諸問題』が刊行できたこと
- ③ 経営研究所ライブラリー刊行を通じた研究活動を活性化できたこと

(2) 今後の課題

- ① 経営研究所の方向性や特徴付けについて議論し、経営学部メンバーに限定することなく大学全体に開かれた経営研究所としての構想を具体化すること
- ② 日本における目白大学経営研究所の位置(役割分担)や豊かな特徴を明確にすること (特徴ある経営研究成果の発信に資すること)
- ③ 経営研究所所員による研究成果実現を支援すること
- ④ 大学院経営学研究科との協賛による特徴があり、かつ有意義な公開講座を随時開講すること
- ⑤ 目白大学経営研究所ライブラリーの継続的刊行により研究活動を活性化し、目白大学の提供できる特徴ある経営教育及び研究内容を発表する機会を提供すること

項目	自己評価
教育	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 入学決定した研修生に対する事前課題の提示と、急性期の看護経験の少ない研修生に対して ICU 研修を実施するよう推奨した。また、昨年度から院外実習の体制として訪問看護ステーション実習を先に計画し、早期から退院支援を計画できるようにしたこと、病院実習時に受け持つ対象者の計画立案の段階で目標が明確となり実習を円滑に進められた。</p> <p>② 実習施設（8施設）の指導者と教員会委員、入試会委員、専任教員による「実習指導者会議」を開催した。会議の内容は研修生の実習評価並びに研修生に対する指導方法のあり方などの意見交換であった。認定看護師に求められている役割の指導技術として、「リーダーシップ力」について知識では理解しているが行動変容するまでには至らなかったという評価であった。次年度に改善したい。</p> <p>③ 日本看護協会認定審査に向けて次の2つを計画実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 課程修了者を対象とした「フォローアップ研修」を2回実施。ともに60数名が参加し、当機関以外の認定看護師も多数参加し、認定看護師のレベル保持並びに相互交流の場となった。他教育機関からの参加者の増加は研修事業が認知されつつあることを示している。研修終了時には毎回アンケートを実施し、その結果を次回テーマや講師選定に反映していることも参加者の満足度に繋がっていると考えられる。また、研修受講証の発行は5年毎の認定資格更新のポイントになり、これも参加の動機として大きい（認定教育機関で認定看護師を対象とした研修事業はポイントが高い）。 ・ 認定資格審査の本試験を想定し事前に「認定模擬試験」を実施。試験終了後には問題の解説を実施した。本試験に向けてさらに学修する姿勢が強くなったと考えている <p>④ 10月に開催した脳卒中予防の「市民公開セミナー」は科目としての教育目標達成のほかに、「企画力」「リーダーシップ」「チームワーク」等の力が副次的に身についたと考えている。これは入学時点から開催に向けて研修生全員が主体的に企画・運営を行うよう指導したことの効果と思われる。</p> <p>(2) 今後の課題 認定看護師教育課程は3年経過した。今までの評価を踏まえ、カリキュラム見直しをしていきたい。</p>
研究	<p>(1) 特筆すべき事項 特になし</p> <p>(2) 今後の課題 認定教育課程担当の専任教員は毎年新人のため、研究に着手することが難しい中で、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の役割行動の変化として「リーダーシップ行動の変化」について3期生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、リーダーシップを発揮するうえで自分のコミュニケーション能力や交渉力の不足をあげた者が多く、自分に何が不足しているかについての分析や理解に欠けていたとした者もいた。この結果を共通科目の「リーダーシップ」や「相談」の担当講師と共有して、臨地実習において各自の課題に即したリーダーシップ行動が取れるよう学習の統合を図っていく。</p>
学生指導	<p>(1) 特筆すべき事項 特になし</p> <p>(2) 今後の課題 研修生は臨床経験、年齢、施設の実態等からさまざまなキャリアの者が入学してくるため、規定の教育科目と時間数では教育の目的達成に苦慮することが多い。そのため、個別面接、個別指導にかなりの時間を要している。特に学外実習では研修生が過去の経験から役割の変化として行動ができず、教員は臨床指導者と研修生の間でマネジメントすることが多い。そのため、実習前に施設の事前訪問を行い、臨床指導者とコミュニケーションをとりながら実習計画の調整を行うことができる体制作りを引き続きしたいと考えている。</p>
社会貢献	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 脳卒中予防のための市民公開セミナー「ストップ！脳卒中」を10月5日に開催した。目的は脳卒中予防の啓蒙と早期受療、本課程必須科目の教育の一貫として研修生が主体的に計画し実施。対象は和光市民、内容は消防署に救急車出動の協力を要請した。専門医の講義、予防等のしおり作成、展示、寸劇等により理解しやすかったとの評価であった。</p> <p>② 第2回フォローアップ研修を平成26年2月15日に実施。対象は本課程修了者。内容は「脳卒中治療ガイドラインと早期離床」「ADLの定義ならびに評価」について2名の講師による講演。しかし、大雪のため14名の参加者であった。</p> <p>③ ICF学習会の開催（大川弥生講師）。対象者は研修生のほか訪問看護ステーション看護師も多く参加した。</p> <p>(2) 今後の課題 メディカルスタッフ研修センター内の視聴覚教材等の整備状況から、多くの参加者の講演等の活動は難しい状況である。看護の質向上のため設備等の確保を徐々に行いたい。</p>
組織マネジメント	<p>(1) 特筆すべき事項</p> <p>① 平成26年度は事業計画として7か月の認定教育課程が9月から開始されることに伴い、4月から9月までの期間には認定看護師を対象とした研修プログラムの検討に着手した（研修内容、講師選定、予算、パンフレット作成、募集方法等）。</p> <p>② 教育課程運営に際し、専任教員が毎年交代するため、確保に苦慮する状況である。平成26年度は国立東埼玉病院院長並びに看護部長の好意により6月から平成27年3月まで本学修了生の1期生が就任することになった。</p> <p>③ 中山医学大学看護部の教員来日により懇親会参加並びに見学による院内の説明に協力した。</p> <p>(2) 今後の課題 専任教員の確保と新規事業が円滑に進められるよう、学内各部署に協力要請と支援を依頼する。</p>
その他	<p>(1) 特筆すべき事項 平成24年度日本看護協会認定審査に不合格となった修了生2名は合格した。平成25年度の不合格者2名についてはフォローアップ研修に参加させ、平成26年度の資格試験を受験した。</p> <p>(2) 今後の課題</p> <p>① 専任教員には本学修了生の認定看護師資格者を確保するよう努力する。</p> <p>② 平成27年度には本学看護学部の第1期卒業生が認定教育課程受験資格の「臨床経験5年」目に達するので、卒業生に対する入学者確保の方法と手段を具体的に検討し実施する。</p> <p>③ 脳卒中リハビリテーション認定看護師教育課程を実施している教育機関が埼玉県内に2か所存在。ともに国立の機関であり、入学金や寮完備等で差が生じているのが現状であることから、入学者確保について相当の努力を要する。</p>